

平成26年度指定

スーパーグローバルハイスクール
研究報告書

【第1年次】

平成27年3月



学校法人 名城大学
名城大学附属高等学校

はじめに

学校長 高 須 勝 行

TAKASU Katsuyuki

本校は大正 15 年に名古屋高等理工科講習所として開設され、開学 90 周年を 2 年後に控えた平成 26 年度に、文部科学省のスーパーグローバルハイスクールに指定されました。

申請に当たっては「高大協働による愛知県産業を基盤にしたグローバルビジネス課題の探究」を研究開発課題として掲げました。具体的には、我が国のものづくりの拠点となっている愛知県において、海外進出を推進している企業が直面する、言語、賃金、文化等の課題を学ぶために、地元産業の実情を聞き取り調査したり、海外フィールドワークとして日本企業の海外進出の実態や現地の産業と自然とのかかわりを確認したりして、将来を担う「地球市民」としての責任ある役割を体験的に学ぶことを目指しております。

今回の申請内容は、普通科国際クラスで培った教育活動が基盤となっています。本校の国際クラスは平成 15 年度から英語や国際交流に関心の強い中学生を受け入れ、英語力の育成及び探究活動に重点を置いた教育を行ってきました。具体的には、名城大学人間学部との高大一貫教育を軸にした従来の知識の修得を中心とした教育内容に加えて、会話を中心とした生きた英語力の獲得を目指し、初年度入学生よりニュージーランドへの修学旅行を実施したり、英検・TOEIC 等の資格取得を目指す一方で、卒業論文として自ら課題を見つけ出し解決策を提言する調べ学習をして 8,000 字以上にまとめた上で全員の前で発表し、さらに英語によるプレゼンテーションに取り組んできました。その結果、第 58 回全国学芸サイエンスコンクール（主催:旺文社、後援:内閣府・文部科学省・環境省）に入選、JICA 国際協力中学生・高校エッセイコンテスト 2014 と国際ユース作文コンテストで佳作を受賞し、日台文化交流青少年スカラシップ作文で秀作に入賞するなど、10 年間の継続的な取り組みの成果を改めて実感することができました。

今回のスーパーグローバルハイスクールの指定を契機として、さらなる飛躍を目指し、これまでの研究成果を一段引き上げること、そして対象生徒の規模や活動内容等を拡大し、学校内外へのいっそうの普及に重点を置いて取り組んでまいります。

日々、世の中は変化しています。教育現場にもその変化への対応が求められています。同時に、質的な要求は高まっています。スーパーグローバル事業では、生徒にとっては未来のグローバル・リーダーになる環境が整えられ、教員にとっては研鑽を積む機会が与えられることで指導的人材は着実に育ちつつあります。過去の研究を通じて得ることができた成果と学校間の絆とも言える強い連携体制を生かし、これからもスーパーグローバルハイスクール事業に真摯に取り組み、普及に努めます。

最後になりましたが、本研究の機会を与えていただいた文部科学省、事業の運営にあたり指導と助言をいただいた愛知県教育委員会・名古屋市教育委員会並びに SGH 運営指導委員会の委員および学校評議員など、関係の皆様方に厚くお礼申しあげます。また、高大協働教育の推進に積極的かつ献身的に取り組んでいただいた名城大学の教職員ならびに、TA として協力をしていただいた学生・OG・OB の皆様に感謝の意を表します。

目 次

< 1 > 本校について.....	1
1 学校の概要.....	1
2 教育目的.....	1
3 教育方針.....	1
4 生徒数とクラス数(平成 26 年度).....	1
< 2 > スーパーグローバルハイスクール構想の概要.....	2
< 3 > 研究構想概略図.....	4
< 4 > 研究開発報告.....	5
1 研究開発名.....	5
2 研究開発概要.....	5
3 平成 26 年度の研究開発実施計画.....	5
4 管理機関の取組・支援実績.....	6
(1) 授業における連携.....	6
(2) 研究発表会における連携.....	6
(3) グローバルサロンにおける連携.....	7
(4) グローバルリーダー講座における連携.....	7
(5) グローバルパスポートにおける連携.....	7
(6) SGH 運営指導委員会の開催.....	7
5 研究開発の実績.....	10
(1) 探究学習に関わる授業.....	10
(2) 探究学習に関わる課外活動.....	13
(3) 成果の公表・普及.....	34
(4) グローバルパスポート.....	35
(5) 事業の評価.....	36
(6) 報告書の作成.....	37
(7) 他 SGH 指定校との連絡・交流.....	37
6 目標の進捗状況・成果・評価と次年度以降の課題.....	38
(1) 【研究開発目標①】.....	38
(2) 【研究開発目標②】.....	39
(3) 【実践目標①】.....	40
(4) 【実践目標②】.....	43
(5) 【実践目標③】.....	44
(6) 【実践目標④】.....	46
(7) 【実践目標⑤】.....	47
(8) 【実践目標⑥】.....	49
< 生徒作成物 >	50
1 国際クラス第 1 学年「多文化共生Ⅰ」企業課題探究プログラム 企画発表例.....	51
2 国際クラス第 1 学年「多文化共生Ⅰ」インドネシア地域研究レジュメ例.....	53
3 国際クラス第 1 学年「多文化共生Ⅰ」英語プレゼンテーション原稿例.....	54
4 国際クラス第 1 学年「多文化共生Ⅰ」多文化共生プログラムワークショップ感想例..	55
5 国際クラス第 2 学年「多文化共生Ⅱ」ニュージーランド地域研究レジュメ例.....	57
6 国際クラス第 2 学年「多文化共生Ⅱ」ニュージーランド地域研究レジュメ例.....	58
7 国際クラス第 3 学年「課題探究」レジュメ・プレゼンテーションスライド例.....	59
8 国際クラス第 3 学年「課題探究」レジュメ・論文例.....	62
9 国際クラス 海外研修「グローバルレクチャー」ポスター例.....	74
10 国際クラス 海外研修「グローバルアクション」ポスター例.....	75

<1> 本校について

1 学校の概要

本校は大正 15（1926）年に名古屋高等理工科講習所として開学し、平成 26 年で創立 88 年目を迎える。

本校では「生徒の夢を育む愛知県下 No.1 の私立高等学校を実現する」という長期ビジョンのもと、「『知・徳・体』の調和した生徒を育成する」という中期ビジョンを掲げ、生徒一人ひとりが知性と教養を身に付け、たくましさ与他人を思いやるやさしさを兼ね備えた、心豊かな「名城生」に成長することを目指している。また、「地域に愛され信頼される学校 入学して良かった、卒業して良かったと評価していただける学校」を目指し、生徒と教職員が一丸となって勉学や特別活動に取り組んでいる。

本校は普通科と総合学科それぞれに、生徒の多様な進路に応えるためのクラス・系列を設けており、普通科には国公立大学・難関私立大学を目指す特別進学クラス、名城大学の中核をなす一般進学クラスのほかに、先進的理数教育を目指すスーパーサイエンスクラス、グローバル人材育成を目指す国際クラスを設け、総合学科には、数理・社会探究・地域交流・ビジネスの 4 系列を置いている。

2 教育目的

教育基本法・学校教育法に則り、知・徳・体の調和する人格の完成を目指す。創設以来の伝統に基づき、穏健中正で実行力に富み、国家、社会の信頼に値する人材を育成する。

3 教育方針

「教育目的」を実現するために、更に次の 6 つの「教育方針」を定める。

- 1 学習意欲を高める
- 2 基礎学力を伸ばす
- 3 しつけ教育を重んじる
- 4 健全な心身を育む
- 5 主体的な行動力を養う
- 6 創造力の根元である生きる力を養成する

4 生徒数とクラス数(平成 26 年度)

		< 生徒数 >			< クラス数 >		
		1年	2年	3年	1年	2年	3年
普通科	特別進学クラス	96	111	112	3	3	3
	スーパーサイエンスクラス	42	36	28	1	1	1
	一般進学クラス	330	277	287	8	8	8
	国際クラス	39	36	28	1	1	1
総合学科	文系	161	107	88	4	3	3
	理系		55	42		2	1
計		668	622	585	17	18	17

<2> スーパーグローバルハイスクール構想の概要

指定期間	ふりがな	めいじょうだいがくふぞくこうとうがっこう				②所在都道府県	愛知県
26～30	①学校名	名城大学附属高等学校					
③対象学科名	④対象とする生徒数					⑤学校全体の規模	
	1年	2年	3年	4年	計	普通科	1409名
普通科	429	145	24		598	総合学科	463名
						合計	1872名
⑥研究開発構想名	高大協働による愛知県産業を基盤にしたグローバルビジネス課題の探究						
⑦研究開発の概要	愛知県のビジネス課題を軸に、高大・産学協働の探究活動を行う。PBLの授業と課外活動とを融合させたサービ斯拉ーニングによりスキルとマインドセットを育成し、グローバルシチズンシップを獲得させる。評価・検証には、ルーブリック等を用いたパフォーマンス評価、定期的なアンケートによる統計学的手法を用いる。						
⑧研究開発の内容等	⑧-1全体	(1) 目的・目標					
		<p>地球に生きる一市民として、社会や世界の諸問題を当事者意識をもって捉え、他者との協働を通して解決に向かう意欲あふれる人材を育成する。そのための体系的な教育課程やプロジェクト型学習（PBL）の教育課程を開発し、校内及び他校に普及する。</p> <p>以上の目的を踏まえ、研究開発目標として①「グローバルパスポート」制度のプログラム実施、②各教科における PBL の展開例の開発と定着、実践目標として①スキルとマインドセットの育成、②ローカルとグローバルを往還する視座の獲得、③国内外の研修、大会及び社会活動に主体的に参加する生徒の育成、④年間 12 回以上のプレゼンテーションの実施、⑤CEFR の B2 レベル到達率 100%、⑥国際化を進める国内・海外の大学等、課題研究を生かした研究を行える大学へ進学する生徒の育成の計 8 点を設定する。</p>					
		(2) 現状の分析と研究開発の仮説					
		<p>対象である国際クラスの生徒については、探究型学習や英語学習で一定の成果を得た。本 SGH 事業においては、従来の取組では十分には育成できなかった「批判・摩擦・失敗を恐れず、変化する状況へ対応する」マインドセットや「コミュニケーションをとりながら協働し問題解決に向かう」スキルを、課題探究の各取組の中で育成し、それらを通してグローバルシチズンシップを形成していくことが肝要である。</p> <p>そのため、本研究開発においては、「世界の現状と課題に触れる経験」、「自らの意見を発表し、他者と対話・議論する経験」、「自ら新たなネットワークを構築する経験」を重視し、「スキルとマインドセットの育成は、グローバルシチズンシップの獲得に有効である」と仮説を立てる。</p>					
		(3) 成果の普及					
		<p>他の SGH 指定校に呼びかけ、生徒研究討論会「SGH ミーティング」と生徒研究発表会「SGH フェスタ」とを毎年継続的に開催する。同時にパネルセッションも行い、全国の SGH 指定校に広く発表の場を提供する。この活動は研究成果の発表というだけでなく、生徒、教員を含めた指定校相互の交流、情報交換の場であり、また、SGH の成果を広く情報発信し理解を図る、中核拠点的な意味合いも含んでいる。そのため、名城大学と密接に連携し、産業界にも協力を求めて高大・産学協働で実施し、近隣の中学校、高等学校に向けて「SGH ミーティング」及び「SGH フェスタ」実施を案内し周知を図る。ミーティングまたはフェスタ実施後、発表校による研究集録を作成・配付する。</p> <p>なお、平成 28 年度以降は優秀発表者を表彰するとともに、本校の海外研修を利用した海外での発表を計画している。</p>					

<p>⑧-2 課題研究</p>	<p>(1) 課題研究内容 地元産業に根差したグローバル化における諸課題を軸に研究する。ただし、地球市民としての責任感ある姿勢を育むために、経済面のみのアプローチではなく、教科・高大・産学融合型のサポートにより、「人間開発」、「CSV」、「コンフリクト・レゾリューション」、「協働・共生」の観点を学ぶことを特徴とする。研究課題の具体例としては、「愛知県中小企業のグローバル化戦略と課題」、「グローバルな起業モデル」、「外国人労働者との協働・共生モデル」及び「日系企業における多様性の調和とガバナンスのあり方」等があげられる。</p> <p>(2) 実施方法・検証評価 「スーパーサイエンスⅠ」、「多文化共生Ⅰ」、「多文化共生Ⅱ」及び「課題探究」において、研究課題や探究方法の理解、論文作成等を進める。それを補完するものとして、研究課題に関するフィールドワークを国内と海外で関連させて実施し、比較検討する。作成した論文及び課題解決に向けたアクションについては国内及び海外で発表を行う。探究の過程においては、有識者やSGH指定校生徒とも議論を行い、知識と理解を深める。検証は、生徒の意識及び行動の変容等についてのアンケート、プレゼンテーション、論文のルーブリック評価及びコンテスト等の受賞数によって評価する。</p> <p>(3) 必要となる教育課程の特例等 特になし。</p>
<p>⑧-3 上記以外</p>	<p>(1) 課題研究以外の研究開発の内容・実施方法・検証評価 専門的な知識と幅広い教養を身に付け、高度教育への意欲を高めることを目的として、国際クラス第2学年を対象にした学校設定科目「国際教養Ⅰ」及び「国際教養Ⅱ」を開設し、名城大学人間学部の講義を受講する。検証評価は、大学生と統一の定期試験結果によって行う。外国人教員による「英会話Ⅰ」、「英会話Ⅱ」、「英会話Ⅲ」を各学年で実施し、発表や討論に取り組む。評価は発表等のパフォーマンス評価と定期試験の成績を合わせて行う。</p> <p>(2) 課題研究の実施以外で必要となる教育課程の特例等 平成26年度実施分については、特になし。</p> <p>(3) グローバルリーダー育成に関する環境整備、教育課程課外の取組内容・実施方法 ポートフォリオ「グローバルパスポート」を用いて、グローバルリーダー育成のロードマップの開発及び取組み促進の材料とする。また、グローバルリーダー育成の検証評価の指針としても用いる。また、大学教員、専門機関職員、多国籍の人々等、多様な立場の人とともに、共通のテーマについて対話を通じて共に学びを深める、サロンの学習の場「グローバルサロン」を実施する。本取組は全校を対象として毎月実施する。課題解決に向けた活動として、ボランティア活動やアドボカシー活動等に取り組む。</p> <p>(4) 幹事校としての取組（該当する場合のみ記入） 該当なし。</p>
<p>⑨その他 特記事項</p>	<p>主たる対象となる国際クラスは、女子生徒の割合が高く、生徒会執行部など学校全体でリーダーシップを発揮している女子生徒も多い。このことを踏まえて、女性リーダーの育成も念頭に置いている。我が国は先進諸外国と比較して女性リーダーの割合が低いと思われる。SGH教育によってグローバルな視点を身に付けた女性リーダーの育成を目指す。</p>

<4> 研究開発報告

1 研究開発名

高大協働による愛知県産業を基盤にしたグローバルビジネス課題の探究

2 研究開発概要

愛知県の地場産業に根差したビジネス課題を軸に、「人間開発」、「CSV（共通の価値創造）」、「コンフリクト・レゾリューション」、「協働・共生」の観点を学びつつ、高大・産学の連携・協働の探究活動を実施する。

PBL（Project Based Learning の略）を用いた総合的な学習の時間及び学校設定科目と課外活動とを融合させたサービスラーニングを通じて、スキルとマインドセットを育成し、グローバルシチズンシップを獲得させる。「総合的な学習の時間」及び学校設定教科「人間学」、「グローバル」を課題研究の軸とし、国内と海外での「フィールドワーク」で調査を行う。その成果をもとに「SGH ミーティング」でグローバルな課題について議論し、知識と理解を深める。最終的な研究成果を「SGH フェスタ」等で発表する。

評価には、ルーブリックやポートフォリオ等を用いたパフォーマンス評価を用いる。意識や行動の変容、スキルとマインドセット、満足度等についてはアンケートを用いて検証する。

3 平成26年度の研究開発実施計画

グローバルリーダー講座（高大連携講座）として世界情勢に詳しい有識者を招聘する。平成26年度はグローバル・コンピテンシーの素地を作るために、全校生徒を対象に名城大学アジア研究センター名誉センター長（元国際連合事務次長）明石康氏の講義を実施する。国際クラスの第1学年は、「グローバルレクチャー」を実施し、コミュニケーションにおける語学力の重要性を経験させるとともに、日本を一つの対象として考察する視点を養う。

評価については、英語学習に対する生徒の取組みの変容、明石氏の講義後のレポート及びグローバルサロンの参加者数をもとに行う。

また、第二学年以降の円滑な運営を期すために大学、企業及び NPO 等の外部機関との連携強化と学習環境の整備を行う。教育内容については、これまでの国際クラスでの実践をもとにして、PBL の手法及びコンテンツの発展的開発を行う。具体的には、名城大学や海外を含む他大学とのプログラムの確認やフィールドワーク先の検討及び決定、必要とされる ICT 機器の整備及び web 会議システムの導入等を行う。

国際クラスについては、より発展的な教育課程を編成し、普通科文系コースについては、SGH 教育を実施できる教育課程を編成する等、あわせて平成 27 年度入学生の教育課程を完成する。

学年	第1学年	第2学年	第3学年
重点事項	グローバルレクチャー インドネシア研修 アメリカ研修 グローバルサロン グローバルリーダー講座	ニュージーランド研修 アメリカ研修 グローバルサロン グローバルリーダー講座	課題研究論文作成及び発表 アメリカ研修 グローバルサロン グローバルリーダー講座
次年度準備	学習環境整備 グローバルフィールドワーク SGH ミーティング	課題研究論文作成及び発表 SGH フェスタ グローバルアクション	

4 管理機関の取組・支援実績

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
(1) 授業における連携					▶							▶
(2) 研究発表会における連携					▶		▶					▶
(3) グローバルサロンにおける連携												▶
(4) グローバルリーダー講座における連携							▶			▶		
(5) グローバルパスポートにおける連携												▶
(6) SGH 運営指導委員会の開催				▶					▶			

(1) 授業における連携

大学キャンパスにて大学講義の受講（前期・後期 各1単位）

① グローバル教科 科目「国際教養Ⅰ」(1単位)

対 象 : 国際クラス第2学年
 時間割 : 前期 木曜日3限目（高校時間割では5・6限目）
 内 容 : 「コミュニケーション論」
 担 当 : 名城大学人間学部教授 岡戸浩子氏

② グローバル教科 科目「国際教養Ⅱ」(1単位)

対 象 : 国際クラス第2学年
 時間割 : 後期 木曜日3限目（高校時間割では5・6限目）
 内 容 : 「心の科学」
 担 当 : 名城大学人間学部教授 伊藤康児氏

(2) 研究発表会における連携

① SGH 成果報告会

日 時 : 平成27年1月22日（木）
 内 容 : ・SGH 成果報告
 ・英語による生徒発表 海外研修
 ・英語による生徒発表 課題研究
 講 評 : 名城大学アジア研究センター名誉センター長 明石康氏
 名城大学アジア研究センター長・経営学部教授 田中武憲氏

② 国際クラス第3学年課題研究発表会

日 時 : 平成27年2月18日（水）
 内 容 : 英語による課題研究発表（国際クラス第3学年全員）
 講 評 : 名城大学 外国語学部（認可申請中） アーナンダ・クマール氏
 名城大学 外国語学部（認可申請中） 藤田衆氏
 名城大学 人間学部 フィリップ・ビーチ氏
 名城大学 外国語学部（認可申請中） 村田泰美氏
 名城大学 外国語学部（認可申請中） 二神真美氏
 名城大学 外国語学部（認可申請中） 柳沢秀郎氏
 名城大学 外国語学部（認可申請中） ポール・デビッド・ウィッキン氏

(3) グローバルサロンにおける連携

第1回（平成26年6月21日）名城大学経済学部教授 渋井康弘氏
第7回（平成27年1月10日）名城大学外国語学部（認可申請中）アーナンダ・クマール氏

(4) グローバルリーダー講座における連携

第1回（平成26年11月17日）
講師：名城大学アジア研究センターセンター長・経営学部教授 田中武憲氏
第2回（平成27年1月22日）
講師：名城大学アジア研究センター名誉センター長 明石康氏
共催：名城大学アジア研究センター

(5) グローバルパスポートにおける連携

国際化推進センターによる「グローバルパスポート」制度の開発

(6) SGH 運営指導委員会の開催

① 第1回 SGH 運営指導委員会

日時：平成26年7月23日（水）14:30～15:20
場所：名城大学附属高等学校 会議室

影戸 誠委員長	森本 仙太委員	伊藤 元行委員	永田 浩三委員
出席	出席	出席	欠席

陪席者：鈴木（勇）、岩崎、羽石（以上、名城大学附属高等学校）
楯、佐藤（以上、名城大学大学教育開発センター（管理機関））
配布資料：資料1 SGH 運営指導委員会名簿（平成26年7月14日現在）
資料2 SGH 運営指導委員会要項（平成26年5月28日付施行）
資料3 平成26年度スーパーグローバルハイスクール構想調書

- (1) スーパーグローバルハイスクール（SGH）事業の紹介。
- (2) SGH 運営指導委員会（以下「本委員会」という）の組織と役割についての説明。

【審議事項】

1. SGH 運営指導委員会委員長の選任について

楯課長から、国際連携を視野に協働教育を進めている影戸 誠委員を選任したい旨の提案があり、全員一致で承認された。

2. 平成26年度名城大学附属高等学校スーパーグローバルハイスクール事業について

影戸委員長から、平成26年度名城大学附属高等学校（以下「附属高校」という。）スーパーグローバルハイスクール事業（以下「SGH 事業」という。）についての取り組み内容を審議したい旨の発議を受けて、羽石教諭から構想調書に基づき、説明があった。
討議は次のとおりであった。

- ・海外研修は、1年生全員が対象なのか。
→ 「グローバルレクチャー」としてのインドネシア研修は、国際クラス1年生の生徒が対象になる。SGH 事業においては、少なくとも2回、活動が活発な生徒であれば、3、4回は海外に出ることを計画している。
- ・海外に出かけていくことは貴重な経験になる。ただし、海外に行く前に期待感を膨らませる工夫も凝らしてほしい。研修の前後の取り組みでも開発構想にも使われている「産業」

をキーワードとして、継続的な取り組みを検討していただきたい。また、海外に行けば英語を使用することの重要性を痛感することになる。教える英語から活用する英語に一層転換していただきたい。

- ・高大連携講座やグローバルサロン（以下、「G サロン」という）では、大学関係者に加え、実践的で面白い企業関係者に関わってもらいたい。
- ・中高生にもものづくりのフェスタへの参加を呼びかけても反響がないが、日本には世界一の技術を有する職種があり、もっと学校が生徒にアピールをしていただきたい。ものづくりの根底も教育上、取り扱ってほしい。技を見ることで、将来に向けたキャリアを考えさせてほしい。高大接続という殻を打ち破って、産業界との連携も進めてほしい。
- ・取組名称は興味深いものである。今年、愛知県で環境問題の世界的な大会が開催されるが、そもそも愛知県は、環境に対して独自の取り組みを進めてきた。環境問題を学ぶことで、生徒の情報発信力を養成していただきたい。グローバル教育を進めるうえで、環境は絶好のテーマであると考えている。
- ・将来的に SGH で学んだことを継続して学び続けるためには英語力が必要になる。SGH の取り組みにおいては、自分の将来設計に結び付けられる工夫をお願いしたい。

各委員からの意見を踏まえ、今後の取り組みを発展させる方向性が承認された。

② 第 2 回 SGH 運営指導委員会

日 時：平成 26 年 12 月 10 日（水）16：10～16：37

場 所：名城大学附属高等学校 会議室

影戸 誠委員長	森本 仙太委員	伊藤 元行委員	永田 浩三委員
出席	出席	出席	出席

陪席者： 高須学校長、金子教頭、羽石教諭（以上、名城大学附属高等学校）
楯、佐藤（以上、名城大学大学教育開発センター（管理機関））

配布資料： 資料 1 G サロン・高大連携講座（グローバルリーダー講座）
資料 2 グローバルレクチャー日程表
資料 3 グローバルアクション日程表
資料 4 課題研究例
資料 5 英語資格取得状況 SGH 中間発表会

はじめに、高須勝行附属高等学校長から、開催挨拶があった。

【報告事項】

第 1 回 SGH 運営指導委員会議事要旨の確認。

【審議事項】

1. G サロンと高大連携講座（グローバルリーダー講座）の報告について

影戸委員長から、平成 26 年度スーパーグローバルハイスクール（以下「SGH」という）事業における G サロン及びグローバルリーダー講座の取り組み内容を報告する旨の発言があり、羽石教諭より、資料に基づき G サロン及びグローバルリーダー講座の取り組み内容について説明があった。

2. グローバルレクチャー（インドネシア研修）の実施報告について

影戸委員長からグローバルレクチャー（インドネシア研修）の実施報告をする旨の発言があり、羽石教諭による資料に基づいた説明をもとに、以下の討議を行った。

- ・ホームステイは何日間行ったのか。
→ ウブド地区に 4 日間ホームステイをした。自然豊かな場所であり、虫が多いことなど日本との環境的な違いを「不衛生」として否定的だった生徒も、様々な側面を体験的に学ぶことにより、それを「文化」として理解し、積極的に適応する生徒も見られた。
- ・ウブド地区での会話は、何語なのか。

- ほぼ英語とインドネシア語であるが、片言の日本語でも話をした。
- ・体調を崩した生徒はいなかったか。
- 途中で体調を崩すことなく、全員、元気に帰国した。

3. グローバルアクション（アメリカ研修）の説明について

影戸委員長から、グローバルアクション（アメリカ研修）について、説明する旨の発言があり、羽石教諭による資料に基づいた説明をもとに、以下の討議を行った。

- ・参加人数が少ないのはなぜか。
 - 3年生は課題研究発表を参考にする等、学内で選抜された生徒を参加対象としているが、SGH事業は今年度からスタートしたものであるため、現3年生には対応していない。そのため、今年度はGサロンに参加している全校生徒を対象に公募した。応募者から語学力・意欲・目的意識・集団性などの観点から選考した結果、10人の枠に対して8人が合格となった。
- ・本来は、課題研究で提出した論文内容に基づいて報告、討論をアメリカの生徒と行うことになるのか。
 - 論文をそのまま発表・討論に用いても、論文課題についての共通理解がないうえでは一方的な発表になりかねないため、共同学習などの機会を作るなど工夫のうえで、互いに学び合う環境づくりが必要になる。
今回は、1年生から3年生までが参加するため、3年生は発表の準備は整えているものの、「発表・討議」としての時間は確保していない。しかし、現地高校での授業や、大学・企業訪問を通して意見交換を行う機会を用意している。

4. 課題研究と英語資格取得状況について

影戸委員長から、課題研究の実施及び英語資格取得状況について、報告説明を求め旨の発言があり、羽石教諭より、資料に基づき報告及び説明があった。課題研究については次のような質疑が行われた。

- ・国際クラスの3年生が8000字以上の論文及びサマリーを作成しているそうだが、高校生で8000字は大変だろう。
 - 高大一貫教育をスタートする際の人間学部と調整の結果、十年間、この文字数で実施してきた。今後は課題研究の形式を変更していくことも検討しているため、文字数も併せて検討する。

5 研究開発の実績

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
(1) 探究学習に関わる授業												→
(2) 探究学習に関わる課外活動												
① 海外研修								→			→	
② ローカルフィールドワーク						→						→
③ SGH ミーティング、SGH フェスタ				→						→		
④ G サロン											→	
⑤ グローバルリーダー講座								▶		▶		
(3) 成果の公表・普及												→
(4) グローバルパスポート												→
(5) 事業の評価												→
(6) 報告書の作成							→					→
(7) SGH 指定校との連絡・交流												→

(1) 探究学習に関わる授業

① スーパーサイエンス I (1単位)

対 象 : 一般進学クラス及び特別進学クラス第1学年

内 容 : 国際クラス以外の普通科の1年生全員を対象として総合的な学習の時間として実施する探究学習のエッセンスを広く普及する科目である。

探究の基礎を支える、話す・聞く・書く・読むなどのベーススキルをマインドマップを用いて習得するとともに、生涯にわたって学び続けるために、主体的な行動力と学びのベーススキルを習得すること、キャリア意識を育むことを目指す。

アカデミックスキル I マインドマップの意義と方法	自己理解① マインドマップを使った自己紹介 自己理解② 作成したマインドマップを用いた発表
アカデミックスキル II アイデアの作り方、集め方	新聞から考える① 自分の興味関心に沿って記事を集める
アカデミックスキル III テーマ決定の方法	新聞から考える② 集めた記事の中から研究テーマを選ぶ
アカデミックスキル IV アイデアのまとめ方	新聞から考える③ 集めた記事を模造紙にまとめる
アカデミックスキル V プレゼンテーション	新聞から考える④ まとめた内容のプレゼンテーション
アカデミックスキル VI レポートの作成方法	新聞から考える⑤ レポート作成
アカデミックスキル II アイデアの作り方、集め方	「キャリア」を考える① 自分のキャリアについて考える 「キャリア」を考える② キャリアモデルについて調べる
アカデミックスキル VI インタビュー	「キャリア」を考える③ キャリアモデルとなる人物にインタビューする
アカデミックスキル VII 社会人基礎力(チームワーク)	「キャリア」を考える④ グループでポスター作成および発表

② 総合的な学習の時間：多文化共生Ⅰ（1単位）

対象：国際クラス第1学年

内容：課題探究に向かう科目として、思考や探究の「型」を学ぶとともに問題解決に向かう道筋を意識した探究学習を実施する。また、世界をベースに学び続けるために、自己理解を進め、多様性を積極的・肯定的に受け入れる態度を育成するとともに、コミュニケーション力やコラボレーション力の育成を図る。



アカデミックスキル	<ul style="list-style-type: none"> (1) アイデア・思考の出し方:ブレインストーミング (2) アイデア・思考の整理の仕方:マインドマップ (3) 調査方法:アンケート調査・インタビューワーク (4) 情報のまとめ方:レジュメ作成 (5) 発表の仕方:プレゼンテーションの構成の仕方
多文化共生プログラム	<ul style="list-style-type: none"> (1) マインドマップによる自己理解と他者インタビュー (2) 他者紹介記事「この人」作成 (3) 多文化理解ワークショップ 「異文化理解」、「豊かさランキング」、「貿易ゲーム」、「バーンガ」、 「対立・問題の解消」、「難民のカバン・人権」、「ESD提言」 (4) インドネシアにおけるESD・ESDフォーラムへの参加 (5) 英語でのプレゼンテーション
企業課題探究プログラム	<ul style="list-style-type: none"> (1) 仕事意識を知る (2) 企業研修に取り組む・・・アンケート調査・調査レポート作成・報告 (3) 企画会議を開く:企画案の整理・プランニング (4) 中間報告をする (5) 企画を見直す (6) プレゼンテーションをする
グローバルレクチャープログラム	<ul style="list-style-type: none"> (1) インドネシア地域研究 (2) 日本文化研究 (3) レジュメ作成・発表 (4) フィールドワークレポート作成

③ 総合的な学習の時間:多文化共生Ⅱ（2単位）

対象：国際クラス第2学年

内容：広く問題意識をもちながら課題についての理解を深め、当事者意識をもって探究活動を行うことを目的とする。探究型学習における議論を通して、他者との摩擦に対する耐性及びリーダーシップが育まれ、調査を通して視野の拡大やマイノリティへの気づきを得ることが期待される。

「多文化共生Ⅰ」の上位科目として位置付けるとともに、「ローカルフィールドワーク」及び「グローバルフィールドワーク」を支える科目とする。

具体的な課題に合わせて実施した各種社会調査結果をレポートにまとめ、発表する。それらの活動を通して研究課題を設定し、先行研究の分析等を行う。



ニュージーランド研修プログラム	<ul style="list-style-type: none"> (1) ニュージーランド地域研究・日本文化研究 (2) レジュメ作成・プレゼンテーション(日本語・英語) (3) 現地聞き取り調査 (4) 調査レポート作成・プレゼンテーション
国際協力活動	<ul style="list-style-type: none"> (1) 世界の諸問題と日本の関わり・・・グループ別調査・発表 (2) フィールドワーク:JICA (3) 国際協力:フェアトレード/自分たちにできること (4) 国際協力活動 ・世界の同世代で歌をつなぐプロジェクト

	連携先 ・青年海外協力隊カンボジア派遣員 吉田麗美氏 ・青年海外協力隊ザンビア派遣員 太田孝幸氏 ・アメリカ Hilltop Highschool ・ニュージーランド Horowhenua College ・オーストラリア Fresh water christian college ・インドネシア SMA1 UBUD ・フェアトレード普及プロジェクト 連携先 イオントップバリュ株式会社管理本部人事総務部 有本幸泰氏
南山大学連携プロジェクト「モノを読み解く」	(1) 博物館資料を探す (2) モノを見るときは～資料画像から…レポート作成 (3) モノを見るときは～実物資料から…スケッチ・レポート作成 (4) 昭和の逸品とそれに関わる家族のストーリーについて発表 (5) 土器を使ってモノの作り方を見る (6) モノを言葉で伝える…レポート作成 (7) モノとモノの組み合わせに意味を見出す…発表
キャリア研究	(1) 世界をベースにした仕事・ロールモデルを調べる (2) グループで話し合う (3) 個人でまとめ発表する
課題研究導入	(1) 現象と理論の関係を知る (2) 作文と論文の違いを知る

④ 総合的な学習の時間:課題探究(4単位)

対象 : 国際クラス第3学年

内容 : 課題研究論文を作成し、自らの研究課題の解決に向かって周囲に働き掛けながら仲間を増やし、解決に向けたアクションに移す方法を模索することを目的とする。その結果、論理力や表現力が鍛えられるとともに、問題解決能力を伸長させることも期待される。



「多文化共生Ⅱ」の上位科目として位置付け、研究課題について掘り下げて学ぶ。先行研究の分析や追加調査、10,000字程度の研究論文の執筆等を行い、国内外の各種大会に参加する。また、SGH フェスタに向けた校内発表会を実施し、さらなるブラッシュアップを行う。

ガイダンス	作文と論文の違いを知る
リサーチトピックの設定	(1) 問題意識・問題の焦点を設定する (2) 問題の背景(先行研究を踏まえる)を考える (3) 調査の重要性を知る (4) 分析の方法を学ぶ (5) なぜその方法で分析するのかを検討する
先行研究分析	(1) 図書館を使いこなす (2) 情報検索ツールを使う
アウトラインの設定	研究の手順、方向を描く
調査手法の検討	調査の手法・分析方法を検討する
課題研究論文執筆 スライド作成	(1) 要旨別で8000字程度で作成する (2) 表紙・目次・引用等の書式を整えて提出する (3) 英語によるアブストラクトの作成する (4) 日本語・英語によるスライドの作成する
課題研究発表会	(1) 日本語…平成26年10月21日(火) (2) 英語…平成27年2月18日(水)

(2) 探究学習に関わる課外活動

① 海外研修

A 「グローバルレクチャー」としての「インドネシア研修」

国際クラス第1学年の生徒全員(36名)により、平成26年10月26日～11月1日の期間で実施した。

詳細については下記「平成26年度 海外研修(インドネシア)報告書」を参照。

平成26年度 海外研修(インドネシア)報告書

1 研修の目的と内容

本校が目指すグローバルリーダーとは、「地球に生きる一市民として、社会や世界の諸問題を当事者としての意識をもって捉え、他者との協働を通して解決に向かう意欲あふれる人材」と考え、グローバルシチズンシップ(地球市民性)をもって行動する人物を想定している。その育成のために、「世界の現状と課題に触れる経験」、「自らの意見を発表し、他者と対話・議論する経験」、「自ら新たなネットワークを構築する経験」の3点を重視して研究開発を行っている。

本研修はそれら3点のうち、「世界の現状と課題に触れる経験」を主に担い、グローバルリーダーの素地を作ることが目的である。そのため、自らの壁を破り、グローバルな視野をもって自己を客観視すること、異文化との相違点と共通点を知ることを実践する。

現地での講義は、現地と日本のつながりや共生の在り方、現地でのグローバル課題をテーマとする。実習活動は、「伝統の独自産業化～課題と新たな展開～」をテーマとし、①現地生徒と協働で伝統産業の状況を調査し、伝統を独自産業化している様子とそれに関する課題について学ぶ。②現地生徒のキャリア形成の過程で、どの程度、伝統とその独自産業化が影響しているかを調査し、伝統の独自産業化に伴う課題の解決策を模索する。③それらの学習や実践を通して、「コラボレーション力」や「問題発見・解決能力」といったスキルと、「多様性の認識と共感」、「批判・摩擦・失敗を恐れない」、「変化への対応」といったマインドセットを向上させることが見込まれる。④結果として、自らの「アイデンティティ」を再確認することや「多様性の認識と共感」をもつこと、キャリア形成に良い影響を及ぼすことが期待される。

2 背景

名城大学附属高校国際クラス1年生は、「多文化共生」及び「総合的な学習の時間」で、基礎的なアカデミックスキルと多文化共生社会における基本的なマインドセットを学んでいる。今後、2年生では「多文化共生Ⅱ」等を通して探究学習をさらに進める予定である。

インドネシアはアジアに位置する日本と同じ島国で複雑な歴史を持つ。日本と比較するとその経済規模は小さく、開発途上国であるが、近年では毎年5%を超える経済成長率を維持し、その経済発展は著しい。日本企業の進出も多く、貿易も日本との関係は深い。

また、本研修を実施するバリ州は、イスラム教徒の割合が非常に多いインドネシアの中で唯一ヒンズー教徒の多い地域であり、タブーが少なく、宗教に関わる内容についての学習も可能である。

3 研修の特色

【特色①】

同じアジアに位置する国を理解することは、今後の社会では必須である。特に、経済が急速に発展しつつも、近代日本の大家族制を彷彿させるような暮らしが続く現地においては、伝統と産業化の問題、地域とグローバルの問題、同世代のキャリア形成について、体験と交流を通して学ぶことができる。

このような、日本が過去に経験してきた産業化とその諸問題の教訓を、現地の状況と比較検討しながら学ぶことができるのは有意義である。

【特色②】

インドネシアは、イスラム教を中心とした国家である。しかし、唯一バリ州ではヒンズー教を信仰する人々が多く、宗教に対して寛容である。他の地域では、宗教・信仰に対するの会話がタブーになることも多いなかで、互いの宗教観・価値観をも話し合えることは、多文化の理解に重要である。

【特色③】

インドネシアの公用語はインドネシア語であるものの、キャリア形成と語学習得は密接な関係にあり、多くの人々が第2外国語としての英語を利用する状況にある。様々な人々が生きるために英語を活用している環境であり、「コミュニケーションツール」としての英語という姿勢を学ぶには適地である。

4 対象者

名城大学附属高等学校 国際クラス1年生 36名

*「多文化共生」の授業にて、事前・事後学習を実施する。

*引率には本校教員3名があたる。3名のうち1名は、団長として、本研修の現地責任を担う。1名は本研修の運営のとりまとめを行い、1名はその支援を行う。総計39名。

5 実施時期

平成26年10月26日～11月1日 6泊7日（機内泊を含む）

6 費用(概算)

1名につき190,000円

7 主な研修先と研修内容

(1) マングローブ環境調査・海ガメ保護活動「観光産業と環境セミナー」

大規模リゾートホテルの建設により、埋め立てが続く現地であるが、埋め立てを促進・継続させる要因には2つあるとされる。1つは雇用の創出、もう1つは人々の環境に対する意識の欠陥といった社会的・心理的要因である。現地で地元の人々と連携して生態系を保全する活動を行っている日系企業の協力を得て、マングローブ環境調査と海ガメの保護活動に参加するとともに、その状況について講義を受けた。



(2) 伝統工芸品アタの生産と海外進出状況視察「伝統産業のグローバル化セミナー」

以前は楯として編まれていたアタが、生活雑貨として製品化され世界中から購入されている。アタ製品はトゥガナン村が生産の拠点とされ、今もその村を中心に生産が続けられる。本研修では、「地域（ローカル）の産業や伝統を極めていくことで世界（グローバル）に繋がっていき、世界（グローバル）に展開することで、地域（ローカル）の産業や伝統も磨かれる」というGサロンでの講師の言葉を検証すべく、アタ製品を生産・販売をしている工場でフィールドワークを実施した。また、同じ製品の日本での販売価格と比較しながら流通の過程等を学んだ。



(3) ウブド第一高校生徒とのプレゼンテーション・ディスカッション

両校が互いの国や文化に関するプレゼンテーションを行ったうえで、ディスカッションを行った。日常生活を含む文化の違いは、改めて多様性を実感する契機となったようである。また、ディスカッションではキャリア意識がテーマになったが、現地生徒のキャリア形成に与える伝統や産業の影響、現地産業のあり様・課題についても考える機会があった。



(4)フィールドワーク研修

ウブド王宮・アルマ美術館・農家に分かれて、伝統的な部分と産業化・グローバル化された部分がどのように共存しているのか、また、グローバル化した世界に対してどのような関わり方をしているのかを観察・聞き取りによって調査した。

特に、ウブド王宮では、王宮が地域と世界に担う役割とその変容、アルマ美術館では、現地における戦略、農家では伝統的なスパックの思想やお祀りが現在の生活に与える影響と家族のキャリア意識について学んだ。



(5)地域産業(コーヒー農園)視察・講義受講

第2次世界大戦後一旦は衰退したが、日本によって再興されたコーヒー産業は、現在世界第3位の生産量を誇っている。日本は、戦後初期からODA援助を利用して、現地に品質管理や栽培技術を教えるとともに、現地の人々を雇用し、彼らが農園運営を行う方針を取ることで途上国支援の役割を果たしてきた。また、農園の維持においては、極力伐採を行わないようにすることで自然環境に対する負荷の少ない形を取っている。

フェアトレードの対象となることも多いコーヒーであるが、バリ州キンタマーニ高原付近でとれるアラビカ種は「バリアラビカ 神山」として、日本企業と通常取引がなされている。現地では、日本珈琲貿易株式会社との取引のある農園を視察し、「バリ島の産業・ビジネスと日本」についての講義を受講した。



(6)在デンパサール日本総領事館 安江領事 講義

講師自身のキャリア形成の過程やインドネシアと日本のつながりを向うとともに、領事という職務におけるもっとも重要な要素を基に、グローバルリーダーとしての資質についての講義を受講した。



8 実施内容 ～事前学習・本実施・事後学習の流れ～

(1)概略

計画は本実施をはさんで事前および事後指導を一連の取組として考えた。参加生徒は伝統と産業化、地域とグローバル化に関するテーマについての学習を進め、また、自国と訪問国に関するレポートをまとめるとともに、英語で発表する準備をした。テーマ学習については現地で各課題を体験的学ぶことによって、多面的に理解するよう設計し、参加教員は、テーマ学習と英語による発表の指導、現地での探究型学習の開発を行った。

なお、普及の観点から、愛知県のESD交流フェスタでのポスター掲示及び校内の生徒研究発表会にて取り組みの成果を発表した。下記に年間計画の概要を示す。

	月日	取り組みの時間	内容
事前指導	6月21日	課外活動	SGH サロン「グローバル化」
	7月22日	事前説明会	研修についての説明
	7月	多文化共生 I	日本文化研究レポート作成(全員) テーマ決定(全員)
	8月	多文化共生 I	インドネシア地域研究レポート作成(全員)
	9月～10月	多文化共生 I	レポート発表(全員) フィールドワーク準備(全員)
	10月26日～11月1日	本実施	詳細は次項
事後指導	11月	多文化共生 I	個人レポート作成(全員) ポスター作成(選抜)
	11月8日・9日	ESD ユネスコ世界会議併催 あいち・なごや ESD 交流フェスタ	ポスター掲示(選抜)
	11月9日	公開見学会	ポスター発表(選抜)
	1月22日	SGH 成果報告会	海外研修の成果発表会(英語・選抜)

(2)本実施

下記の旅程で事項した。2014年10月26日(日)～11月1日 6泊7日

日次	月日(曜)	都市	スケジュール ＜宿泊先＞
1	10/26(日)	愛知 シンガポール デンパサール	08:00 中部国際空港集合 10:30 空路、シンガポール航空(SQ671)にてシンガポールへ 16:45 シンガポール着 チャンギ空港にて乗り継ぎ 18:05 シンガポール発 シンガポール航空(SQ948)にてデンパサールへ 20:50 デンパサール着 着後、専用車にてホテルへ(所要時間20分) ＜インナ・グランド・パルビーチホテル＞
2	10/27(月)	デンパサール ウブド	08:30 ホテル発 09:00 ●① 伝統芸能鑑賞「バロンダンス」 13:30 ●② マングローブ環境調査・海がめ保護活動「観光産業と環境」 16:00 ウブドへ出発(約1時間) 17:00 プンゴセカン村・スタジオにてガイダンス ＜ホームステイ＞
3	10/28(火)	ウブド	08:30 スタジオ集合 午前 ●③ 伝統工芸アタの生産と海外進出状況視察 「伝統産業のグローバル化」 ●④ 世界遺産スバック視察「タンパクシリン、テガララン」 午後 ●⑤ ウブド市街インタビュー研修 ＜ホームステイ＞
4	10/29(水)	ウブド	08:00 スタジオ集合 09:00 授業体験(英語他)(6班クラス分け) 10:30 ウェルカムセレモニー 11:00 ●⑥ ウブド、名城生徒によるプレゼンテーション・ディスカッション 13:30 ●⑦ フィールドワーク研修(現地生徒協同学習) 1班:ウブド王宮:歴史、建築、芸能 2班:アルマ美術館:美術館の枠を超えたコミュニティ形成 3班:農業・農家:棚田を中心にした原生活 ＜ホームステイ＞
5	10/30(木)	ウブド	08:00 スタジオ集合 09:00 ウブド高校生と教員集合(場所:ウブド王宮) ●⑧ 地域産業(コーヒー農園)視察・講義受講 「バリ島産業・ビジネスと日本」の講義 ※ウブド第一高校生徒・教員と協働学習 14:00 ●⑨ バルヒンズーの総本山ベサキ寺院視察 現地風景の中で人々と神々の一体となった生活を考察 (キンタマーニ高原、バツール湖、ベサキ寺院等) ※ウブド第一高校生徒・教員と協働学習 19:00 ●⑩ 伝統芸能鑑賞「ケチャ」 ＜ホームステイ＞
6	10/31(金)	ウブド デンパサール	09:00 プンゴセカン村集会場集合、専用車にて出発 11:00 ●⑪ 在デンパサール日本総領事館 安江領事 講義 午後 タナロット寺院見学 21:45 シンガポール航空(SQ949)にてシンガポールへ ＜機内泊＞
7	11/1(土)	シンガポール 愛知	00:20 シンガポール着 チャンギ空港にて乗継 01:20 シンガポール発 シンガポール航空(SQ672)で中部国際空港へ 08:40 中部国際空港着 入国手続き、通関

* 添乗員の同行

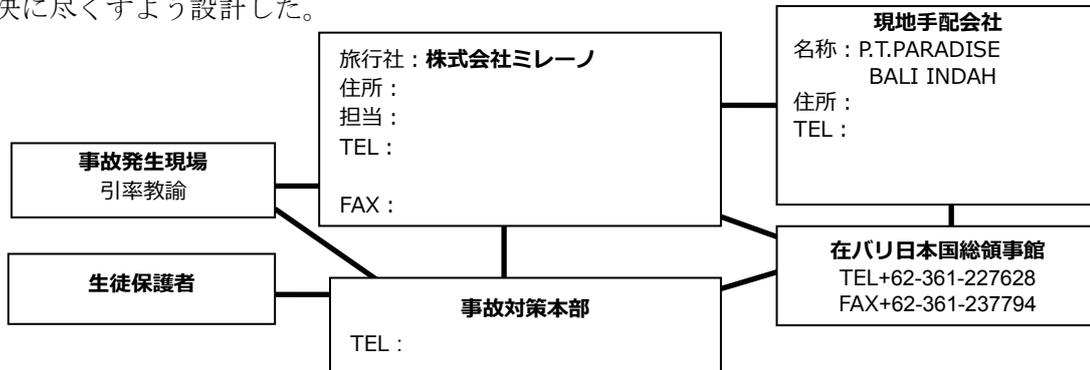
理由 緊急事故対策として迅速な対応の補助的活動および実施時の連絡調整を行う。
日々の旅程について、現地の旅行代理店と密な連絡を取り合うことで情報収集にあたりるとともに、有事の際には後述の「緊急事故対策と報告チャート」に従い速やかな対応の補助的活動を行う。添乗員は現地の訪問施設・企業等との密な連携により企画内容の立案と提案にも深く関与するため、本実施の際にも随時、連携と調整を行うことが必須。

(3)危機管理体制

- ① 訪問先の全行程を添乗員が同行し、現地旅行会社と連携し、非常時の安全を確保する。
- ② 旅行傷害保険、欠航保険に加入する。
- ③ 非常時の連絡体制は、添乗員が携帯電話を携行、学校内は校内連絡網を通じた連絡体制を整備する。
- ④ 感染症対策として外務省情報等現地情報の収集に努め、状況によっては中止も含めて適切に判断する。
- ⑤ 安全体制(図示)

＜緊急事故対策と報告チャート＞

万一交通事故や宿舎での火災、食中毒あるいは天災地変等により、被害が発生した場合、全力をあげて迅速な処置を講じる。また、事故の責任、補償については、直接学校及び旅行会社に責任がない場合でも学校、旅行会社の組織力によって対応し、誠心誠意事故の解決に尽くすよう設計した。



※交流受入先 高等学校

SMA Negeri 1 UBUD (国立ウブド第一高等学校) Jln. Sueta, Sambahan, Ubud, Bali
TEL&FAX:+62-361-973492 担当教員:MS カルシ(日本語教員)

※プログラムコーディネーター

日本・バリ教育文化交流協会 担当:加藤
TEL:

※緊急連絡先

09:00-17:00 名城大学附属高等学校
17:00-09:00 旅行社

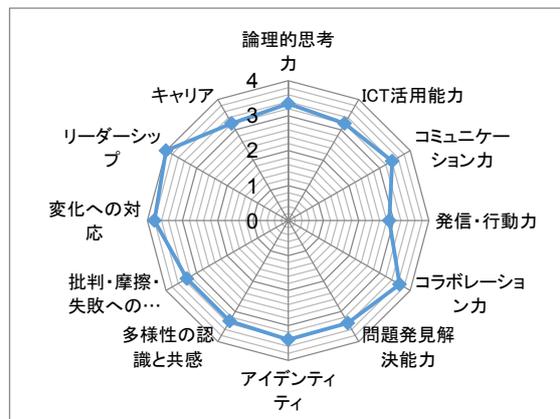
保険会社

9 評価

研修実施後に第1学年全員(36名)に質問紙調査を実施した。質問肢は研修前との変容について、2を「変化なし」として4段階の順序尺度を用いた。

その結果、因子「発信力・行動力」を除いて高いポイントとなった。「発信力・行動力」が他の因子よりも低かった要因としては、現地校で全員が行ったプレゼンテーションに対する反省が反映されていると推察される。事前学習で準備・練習をして臨んだが、現地校生徒のプレゼンテーションの質の高さや英語力の高さと比較して挫折感を味わった生徒が大半であった。研修後のレポートでも「現地でのプレゼンテーションを失敗してしまった」、「プレゼンの失敗が悔しくてならない」といった記述も複数見られた。また、同様に「現地の生徒に自分から話しかけられなかった」との記述も複数見られたことから、「自ら発信したり行動したりする」点において高い評価が出なかったことが推測できる。

しかし、それを含めても全ての因子が向上していることは、本研修が生徒のスキルとマインドセットの向上において機能したと評価できる。



B 「グローバルアクション」に向けた「アメリカ研修」

「グローバルアクション」とは、本来課題研究発表会で選抜された第3学年の生徒を中心に編成し、現地で現地学生や生徒とディスカッションやプレゼンテーションを行うことを中心に計画している。（別紙様式6 平成26年度構想調書 pp.9-10を参照）

SGH事業における課題研究作成は平成28年度となるが、その際の実施に向けて、本年度は国際クラスの第1学年から第3学年、一般進学クラスの第1学年と第2学年を対象に計画したものである。（別紙様式6 平成26年度構想調書 p.6を参照）

詳細については下記「平成26年度 海外研修（アメリカ）報告書」を参照。

平成26年度 海外研修（アメリカ）報告書

1 研修の目的と内容

本校が目指すグローバルリーダーとは、「地球に生きる一市民として、社会や世界の諸問題を当事者としての意識をもって捉え、他者との協働を通して解決に向かう意欲あふれる人材」である。すなわち、グローバルシチズンシップ（地球市民性）をもって行動する人物を想定している。その育成のために、「世界の現状と課題に触れる経験」、「自らの意見を発表し、他者と対話・議論する経験」、「自ら新たなネットワークを構築する経験」の3点を重視して研究開発を行っている。

本研修は、それら3点を踏まえ、Gサロンでの経験を活かし、自ら行動したり実践したりしたいという意欲あふれる生徒を対象に、グローバルリーダーへと一歩を踏み出すことを目的としている。

研修内容としては、以下の3点を主眼とした。

①現地生徒との協働学習や現地大学生とのセッション

②現地企業のCSV活動の現状と課題に関する学習

③民族の共生の現状と課題に関する学習

これらの学習や実践を通して、「論理的・批判的思考力」や「発信力・行動力」、「コラボレーション力」、「問題発見・解決能力」といったスキルと、「多様性の認識と共感」、「批判・摩擦・失敗を恐れない」、「リーダーシップ」といったマインドセットを向上させることが見込まれる。

2 背景

本研修の実施までには、全校生徒対象の「Gサロン」を計7回実施し、「日本と世界の関わり」や「自らとグローバルイシューとの関わり」、「グローバルとローカル」について考える機会をつくってきた。「Gサロン」での各講師による問題提起を通じて、世界の諸問題に対して意見や考えを持つ生徒が増え、同時に「自分でも何らかの行動を起こしていきたい」、「将来世界で活躍したい」といった強い意欲を持つ生徒が増加してきている。

また、本研修に参加した生徒のうち、2年生、3年生はニュージーランドでの研修を経験しており、1年生はインドネシアでの研修を経験している。各自が以前の研修でも現地校生徒との協働学習やホームステイを通して学校文化や産業の違い、文化的な多様性等について実感を持って学んできた。本研修においても、全ての機会から体験的に学びたいという意欲が高く、以前の研修国の文化とも比較をしたいといった意欲を持っている生徒であった。

研修地であるサンディエゴ及びロサンゼルスは、アメリカ南西部に位置し、ヒスパニック系、アジア系移民の多いところとしても知られる。また日系企業の進出も多い地域である。移民の国ともいわれる当該国において、異なる文化的背景を持つ人々がどのように共生・協働しているのか、また、文化的摩擦をどのように低減しているのか、といった異なるバックグラウンドを持つ人々の共生社会を学ぶに適した地である。

また、一般財団法人経済広報センターによると、アメリカでは、「1990年代の後半から、企業は利益を追求するだけでなく法律の遵守、環境への配慮、コミュニティへの貢献等が求められ、企業の社会的責任が問われるようになった。2000年代には、企業に対する社会的責任を法律で定めていくというような法的整備・拘束等が進められていくようになった。また同時に、労働者の人権の保護に関しても関心が高まっていった。」とされている。いち早く法制度を含めてCSR・CSVを企業活動に落とし込む仕組みづくりを進めている点においても、アメリカ企業のCSR・CSV活動を学ぶ意義は大きいと考える。

3 研修の特色

【特色1】

「人種・民族のサラダボウル」とも形容されるアメリカ合衆国において、特にヒスパニック系住民やアジア系住民の多い地域での本研修は、異なる文化的背景を持つ人々がどのように社会を構成しているのかを体験的に学ぶ機会となる。

特に現地高等学校や大学、企業における人種や民族の構成割合、文化的背景の違いに対する配慮や対応策等があるのか、といったことを聞き取り、より具体的に理解することができた。

【特色2】

カリフォルニア州は、日系移民、日系企業の進出が多く、様々な非営利団体が組織されている。したがって、日本の先人たちがアメリカ社会でのどのように共生を図ってきたかの実践を見て取れる地域ともいえる。現地では、全米日系人博物館での学習と、日系移民の方による体験談から、日系移民の歴史、共生への過程と課題の学習を行った。

【特色3】

アメリカ合衆国には世界を代表する教育・研究拠点が数多くあり、当該地域の複数の大学がそれに当てはまる。その中でも世界有数の名門大学とされる UCLA におけるキャンパスツアーと、学生との討論会を実施した。学生はアメリカを母国としない学生を招き、アメリカの大学で研究を進めることの意義や困難、グローバル人材について等、生徒のキャリア形成に直接かかわる内容について話し合いを行った。

4 対象者

G サロンに参加した国際クラス全学年と一般進学クラス第2学年及び第3学年を対象に8名選抜。(内訳：国際クラス第1学年3名、第2学年2名、第3学年2名)

* 課外活動として、事前・事後学習を実施する。

* 引率には本校教員3名があたる。3名のうち1名は、団長として本研修の現地責任を担う。

1名は本研修の運営のとりまとめを行い、1名はその支援を行う。総計11名。

5 実施時期

平成27年1月25日～1月31日 6泊7日(機内泊を含む)

6 費用(概算)

1名につき350,000円

7 主な研修先と研修内容

(1) San Diego History Center「サンディエゴの歴史と他民族共生」 日系移民との座談会

メキシコとの国境に位置し、またアジア系住民も多い当該地域において、その歴史を学ぶ。また、日系移民2世である Mich Himaka 氏の経験談を伺い、日系移民の歴史、アメリカ社会での共生の過程と課題について質疑応答を行った。



(2) 全米日系移民博物館研修「日系移民の歴史から見るコモンランド:コミュニティの心」

移民国家といわれるアメリカにおいて、初めて渡米した明治時代から現在に至るまで日系移民がどのような歴史をたどり、アメリカ政府がどのような政策をとってきたのか、また日系アメリカ人がアメリカに与えた影響や歴史的役割について、自身も日系移民3世である Tami Hirai 氏から講義を受けた。数多くの実物資料や写真を見ながら説明を受け、また日本人移民の背景やコミュニティ形成の過程等を含めて考えることにより、日系移民だけに留まらず、多様なバックボーンを持つ人々が協働・共生するあり方を考える一助となった。



(3)株式会社パタゴニアにおけるフィールドワーク研修「CSVと環境保護について」

パタゴニアは世界的に注目されている CSR・CSV 事業の先駆的な実践企業であり、持続可能な消費や環境保護の徹底に努めている。米国パタゴニア社首席研究員の大原徹也氏の記事と『社員をサーフィンに行かせよう・パタゴニア創業者の経営論』、『レスポンシブル・カンパニー』を読んだうえで、パタゴニアの CSV 活動についての理解の共有と質問事項の精選を行い、サンタモニカ店での研修を行った。店舗マネージャーによる企業活動と社会的責任についての説明をもとに、質疑応答を行ったが、予定時間を大幅に超えるほど、全ての生徒が何度となく質問を投げかける白熱した研修となった。



(4)カリフォルニア州立大学ロサンゼルス校学生とのセッション「UCLAでの学びとグローバル人材」

世界有数の名門大学とされるカリフォルニア州立大学ロサンゼルス校 (UCLA) において、各研究についてのガイダンスと、学生とのセッションを実施した。セッションはネイティブでない3名の学生を迎え、「なぜ UCLA で学ぶのか」、「キャリア形成をどのように考えるか」、「UCLAでの苦労とそれを低減するためには何をどのようにすることが必要か」、「大学内での異文化コミュニケーションをどのように促進するか」といったテーマについて、まずはそれぞれの学生の経験を共有したうえで、積極的に意見交換がなされた。



(5)Hill Top High School 生徒との協働学習

通常の授業に参加して現地の授業スタイルについて調べるとともに、History Centerでの日系移民の体験談をもとにどう考えるか等の意見交換や、サンディエゴの移民の歴史を知るグループワークを行った。

現地の授業にはディスカッションやグループワークを伴うものが多く、生徒の思考を言葉にする機会が多いこと、また、思考の仕方や書き方を学ぶ時間があること等が特徴的であった。また、現地高校は生徒の多くがヒスパニック系であり、国境を越えて通う生徒もいるなかで、7か国語の授業を展開する等、文化的な多様性を積極的に受け入れるカリキュラムが作られていた。



8 実施計画 ～事前学習・本実施・事後学習の流れ～

(1)概略

計画は本実施をはさんだ事前及び事後指導の一連のものとする。参加生徒は事前に移民や CSR・CSV の学習を進め、訪問企業に関する書籍を読んでレポートにまとめた。

現地では、それまで知識のみであった事項について体験を通して学ぶことによって、より深く理解するとともに、考えてきたことを表出させることにより、何らかのフィードバックを得ることができた。それは時に意見の相違を生み、葛藤や摩擦が生じたが、現地の人々がいかに軽々と議論を展開したり臆せず自分の意見を表したりする様を見て、参加生徒も少しずつではあるが、安易に他と同調せずに意見を戦わせる姿勢が見受けられた。

研修参加後は普及の観点から、校内の生徒研究発表会にて取り組みの成果を発表した。下記に年間計画の概要を示す。

	時期	内容
事前指導	事前学習課題	①訪問企業の関連図書の講読 ②サンディエゴ・ロサンゼルス校の移民/CSVに関する学習 ③国際クラス3年生は研究発表の英語版を準備
	12月9日(火) 11:00-12:00	ガイダンス「アメリカ研修について」(羽石) 参加者自己紹介・事前学習課題・今後の予定について説明
	12月10日(水) 16:00-17:00	ガイダンス「アメリカの移民の歴史について」(伊勢田)

	11月25日(火)・12月16日(火) 16:00-17:00	ガイダンス「CSR・CSVについて」(羽石)
	1月10日(土) 13:30-14:30	事前学習課題の成果発表 出発前の最終説明会
	1月25日(日) ～ 1月31日(土)	<主な研修先> 高校 ヒルトップハイスクール 大学 カリフォルニア州立大学ロサンゼルス校 施設 San Diego History Center:「歴史と多民族共生」 全米日系移民博物館「コモンランド:コミュニティの心」 企業 San Diego Gas and Electric:「持続可能な開発ツアー」 パタゴニア本社:「CSVと環境保護」
事後	2月10日(火)	研修レポート提出
	2月26日(木) 放課後	本校 生徒研究発表会にて成果報告(ポスター発表)

(2)本実施

下記の旅程で実施した。2015年1月25日(日)～1月31日(土)6泊7日

日次	月日(曜)	都市	時刻	スケジュール 【宿泊先】
1	1月25日(日)	中部国際空港発 成田空港着 成田空港発 サンディエゴ着	14:55 16:05 17:05 09:50 10:50	成田空港へ(JL3084) サンディエゴ空港へ(JL066) 《日付変更線》 ----- サンディエゴ着 空港でホストファミリーと対面。ホームステイ宅へ移動 【ホームステイ】
2	1月26日(月)	サンディエゴ	AM PM	ヒルトップ HS 授業参加・交流 ●San Diego History Centerにて研修 「サンディエゴの歴史と多民族共生について」 ●日系アメリカ人の体験談 ●シーポートビレッジにて生徒交流 【ホームステイ】
3	1月27日(火)	サンディエゴ	AM PM	ヒルトップ HS 授業参加・交流 ●San Diego Gas and Electricにて研修 「The Sustainability Tour」 ●Old Townにてスカベンジャーハント 【ホームステイ】
4	1月28日(水)	サンディエゴ ロサンゼルス	09:00 09:45	アメリカン航空(AA2623)にてロサンゼルスへ ロサンゼルス着 ●パタゴニア本社訪問 企業フィールドワーク 「企業の責任 CSVと環境保護について」 ●カリフォルニア州立大学ロサンゼルス校 ・キャンパス視察 ・UCLA 学生とのセッション 【Radisson Los Angeles Midtown AT USC】
5	1月29日(木)	ロサンゼルス	09:00 10:00	ホテル出発 ●全米日系移民博物館 「日系移民の歴史から見るコモンランド:コミュニティの心」 【Radisson Los Angeles Midtown AT USC】
6	1月30日(金)	ロサンゼルス	09:00 12:05	ロサンゼルス空港へ 成田空港へ(JL061) 【機内】
7	1月31日(土)	成田空港着 成田空港発 中部国際空港着	16:55 18:25 19:40	中部国際空港へ(JL3087) 到着後、解散

* 添乗員の同行

理由 緊急事故対策として迅速な対応の補助的活動および実施時の連絡調整を行う。
日々の旅程について、現地の旅行代理店と密な連絡を取り合うことで情報収集にあたり、有難いことに、有事の際には後述の「緊急事故対策と報告チャート」に従い速やか

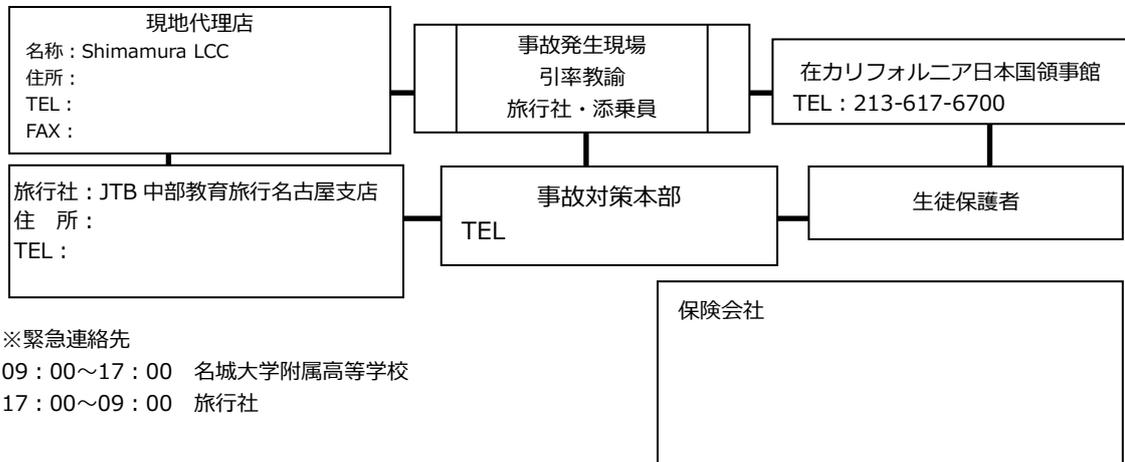
な対応の補助的活動を行う。添乗員は現地の訪問施設・企業等との密な連携により企画内容の立案と提案にも深く関与するため、本実施の際にも随時、連携と調整を行うことが必須。

(3)危機管理体制

- ① 訪問先の全行程を添乗員が同行し、現地旅行会社と連携し非常時の安全を確保する。
- ② 旅行傷害保険、欠航保険に加入する。
- ③ 非常時の連絡体制は、添乗員が携帯電話を携行、学校内は校内連絡網を通じた連絡体制を整備。
- ④ 感染症対策として外務省情報等現地情報の収集に努め、状況によっては中止も含めて適切に判断する。
- ⑤ 安全体制（図示）

＜緊急事故対策と報告チャート＞

万一交通事故や宿舎での火災、食中毒あるいは天災地変等により、被害が発生した場合、全力をあげて迅速な処置を講じる。また、事故の責任、補償については、直接学校及び旅行会社に責任がない場合でも学校、旅行会社の組織力によって対応し、誠心誠意事故の解決に尽くす。

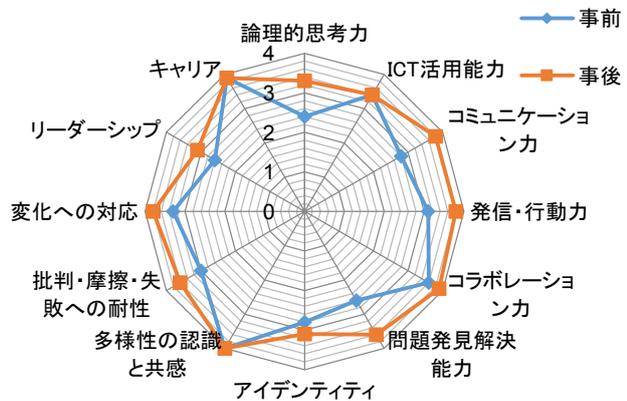


※緊急連絡先
 09：00～17：00 名城大学附属高等学校
 17：00～09：00 旅行社

現地宿泊先 1	La Quinta Inn Chula Vista 150 Bonita Rd、 Chula Vista、 CA 91910 TEL： 1-619-691-1211	1/25～1/27 (教員のみ)
現地宿泊先 2	Radisson Los Angeles Midtown AT USC 3540 South Figueroa St.、 Los Angeles CA90007 TEL： 1-213-748-4141	1/28～1/30 (全員)

9 評価

研修の前後で質問紙調査を行った。選択肢は4段階の順序尺度とした。結果として、ほとんどの因子の平均値は研修後に大きくポイントが上昇している。一方で「ICT活用能力」(3.4ポイント)、「多様性の認識と共感」(4.0ポイント)、「キャリア」(3.9ポイント)に関しては変化が見られなかった。これは、本研修が各学年から意欲の高い生徒が選抜されての実施となったため、キャリア意識や多様性に対する意識は研修前から高く、また、事前研修でのレポート作成やプレゼンテーション作成でもICT



を活用していたため変化がなかったと言えるのではないだろうか。一方で、現地での活動に関する因子の平均値にはある程度開きが出たと言える。

② ローカルフィールドワーク

A 国際クラス第2学年フィールドワーク（全員）

- 実習先 : JICA 中部
実施時間 : 「総合的な学習の時間」における「多文化共生Ⅱ」
内 容 : ・世界の実業と JICA の役割についての講義
・シリア難民に関する講義
・インタビュー調査

B 国際クラス第3学年フィールドワーク（各自）

- 実習先 : JETRO、JICA 等、機関
サガミグループインターナショナル株式会社等、企業
名古屋市観光局、富士宮市等、地方公共団体
実施時間 : 「総合的な学習の時間」における「課題探究」
内 容 : ・インタビュー調査

③ SGH ミーティング、SGH フェスタ

SGH ミーティングは平成 27 年度、SGH フェスタは平成 28 年度の実施予定である。
今年度は平成 27 年度の実施に向けた「プレミーティング」として実施した。

A SGH プレミーティング

本年度は、課外活動「SGH ミーティング」の実施年度ではないが、次年度の実施に向け「プレミーティング」として校内で実施した。また生徒実行委員会を組織し、生徒による準備・運営を進めるとともに、本校国際クラスの卒業生を中心とした大学院生・大学生を招聘し、ピアサポートを取り入れて実施した。

- 1 目的 : 論理的思考力、コミュニケーション力、コラボレーション力、発信力、行動力の育成
- 2 内容 : グローバルなビジネス課題をテーマにグループで議論し、データをもとに課題解決に向けた仮説を立てる。
- 3 テーマ : 「made in Aichi の海外戦略をどうたてるのか。
～販売数量との関連因子をデータから読み解く～」
- 4 対象 : 国際クラス第2学年 33名
- 5 担当者 : 伊勢田・水田・伊藤・羽石
- 6 ファシリテータ : 塚本・前田・加藤（立命館大学）
山本・大矢（名古屋大学大学院）
成瀬（国際基督教大学）
- 7 生徒実行委員 : 安井・松下・上田・勝野・板倉・大鐘・大野
- 8 編 成 : 6チーム（生徒5～6名・ファシリテータ1名）
・各チームには1名ずつ生徒実行委員が入る。
・チームは事前に編成する。

④ G サロン

以下の日程で実施した。詳細は後述の各回の報告書を参照。

回	日時	時間	講師・テーマ
1	6月21日 (土)	10:00～ 12:00	渋井康弘氏(名城大学経済学部教授) 「グローバル化の時代」
2	7月12日 (土)	14:00～ 16:00	田中加奈子氏(JICA ボランティア ウガンダ環境教育隊員) 「国際協力活動」
3	7月26日 (土)	10:00～ 12:00	東裕章氏(青年実業家) 「国際人とは?—自分の色を作る—」
4	9月27日 (土)	10:00～ 12:00	黒沢浩氏(南山大学人文学部教授・人類学博物館) 「カンボジア—やきもの—の村の生活—」
5	10月25日 (土)	14:00～ 16:00	浅谷治希氏(株式会社 LOUPE 代表取締役 SNS「SENSEI NOTE」開発) 「自分の可能性を限定しない」
6	11月15日 (土)	10:00～ 12:00	加藤耕子氏(国際俳句交流会理事) 「現代俳句と HAIKU」
7	1月10日 (土)	10:00～ 12:00	アーナンダ・クマール氏(名城大学外国学部(認可申請中)) 「グローバル人材時代の学び方、生き方～外国人教授の考え」

G-salon 7 LEADERS

6/21 (sat) 10:00-12:00
8F大会議室
渋井康弘氏
名城大学経済学部教授

7/12 (sat) 14:00-16:00
図書館
田中加奈子氏
JICAボランティア
ウガンダ環境教育隊員

7/26 (sat) 10:00-12:00
8F大会議室
東裕章氏
青年実業家

9/27 (sat) 10:00-12:00
8F大会議室
黒沢浩氏
南山大学人文学部教授
人類学博物館

10/25 (sat) 14:00-16:00
図書館
浅谷治希氏
株式会社LOUPE
代表取締役

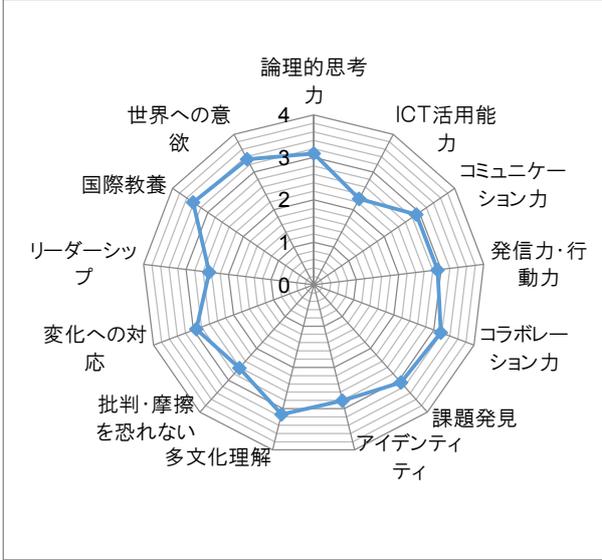
11/15 (sat) 10:00-12:00
8F大会議室
加藤耕子氏
国際俳句協会理事

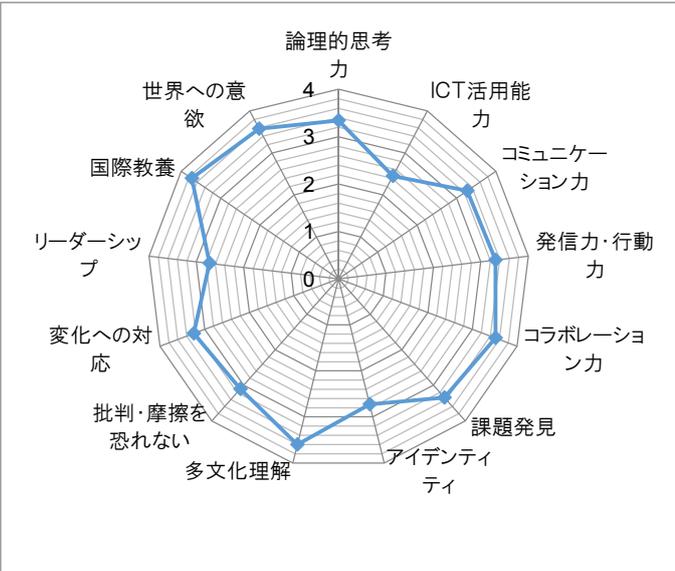
1/10 (sat) 10:00-12:00
8F大会議室
アーナンダ・クマール氏
名城大学経営学部教授

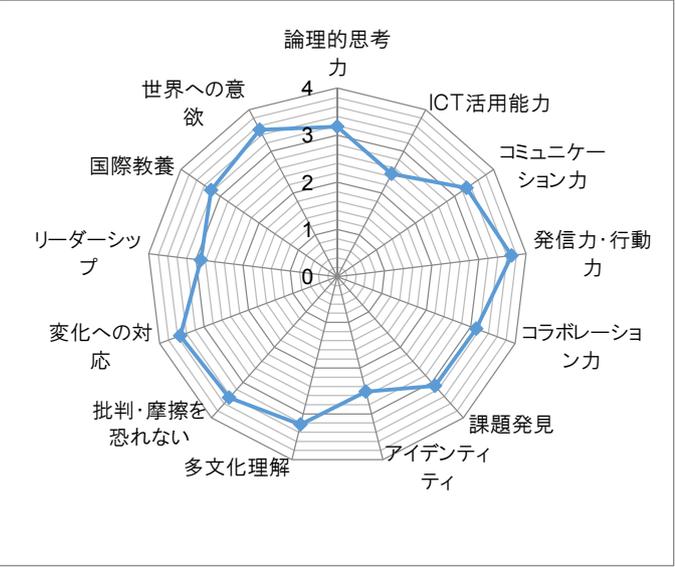
興味のある皆さんの参加を待っています

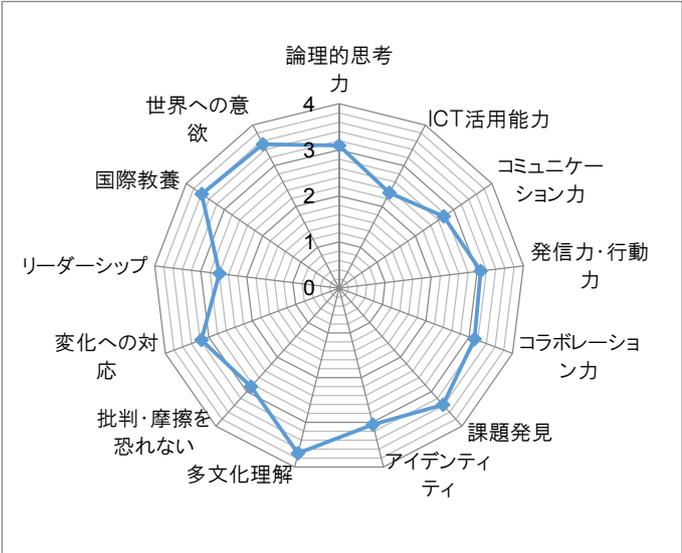
Super Global High school

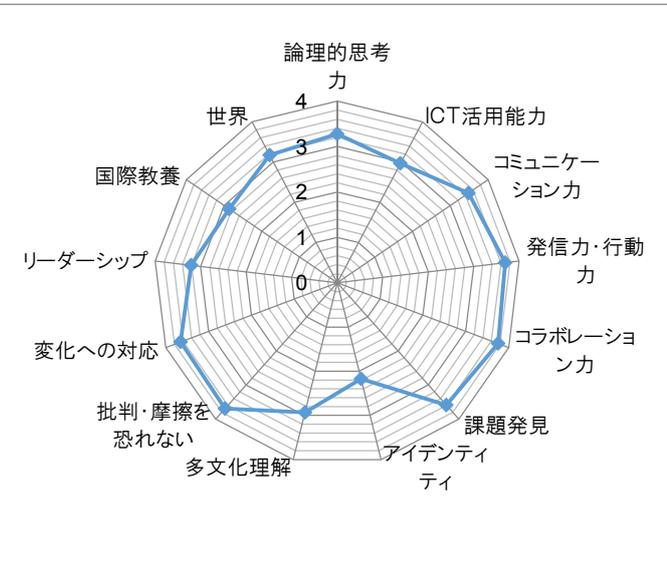
グローバルサロンで世界と日本を感じよう。

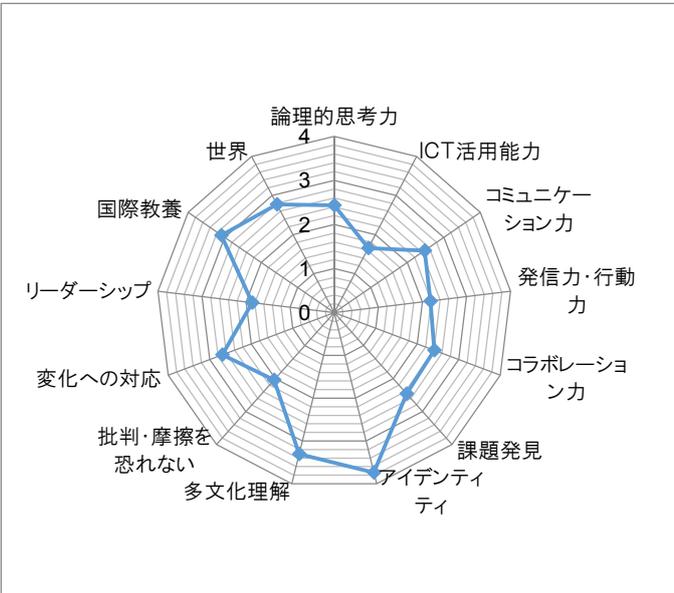
講座名	G-サロン	第1回																												
日時・会場	平成26年6月21日(土) 10:00-12:00	大会議室																												
実施内容	□講演「グローバル化の時代」 □座談会																													
講師	渋井康弘(名城大学経済学部教授)																													
参加人数・担当	全校生徒から希望生徒69名 (国際クラス57名・その他のクラス12名)	紀藤・二宮・角野・羽石																												
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・産業界におけるローカルな技術のグローバル化の進行について ・企業のグローバル化の過程について ・グローバル化における地域の独自性について ・グローバルな世界に生きるために必要な要素について 等 																													
成果	<p>愛知県のモノづくりを支える町工場のフィールドワークやベトナムでの刺繍産業のフィールドワーク等、現場での実情を研究されてきた立場から、グローバル化とはなんなのか、その世界に生きる際に大切にすべきことについてお話しいただいた。このことから、①ローカルな技術を突き詰めていくことがグローバルにつながり、グローバルな展開がローカルの技術を磨く関係を生んでいること、②新たな技術や文化は異質なものの融合から生まれる側面もあり、グローバル化はその絶好の機会であること、③グローバルな世界では自国や地域や自己のアイデンティティへの理解が必要といった点を学ぶことができたのが一番の成果であった。座談会でも多くの生徒が積極的に自らの意見を主張し、議論することができた点も大きな成果であった。</p>																													
評価	<p>生徒の感想には、「グローバルだからこそ外だけではなく自分のことを知らなければならない」、「固有の文化を消すことがグローバルなのではなく、グローバルの根本にそれぞれのローカルがある」等、渋井氏が講座を通して強調された文言が数多く見られた。アンケート結果からも、多文化を理解し、単純な知識だけではない深い教養が必要だという実感、世界で活躍していこうとする意欲等が高まった様子がうかがえた。</p> <p>生徒が主体的に考えを深め討議していた点から、生徒は意識していないままにその他の要素を深めることにもつながったと言える。</p>	 <table border="1"> <caption>アンケート結果のレーダーチャート</caption> <thead> <tr> <th>項目</th> <th>スコア (0-4)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr><td>論理的思考力</td><td>3.5</td></tr> <tr><td>ICT活用能力</td><td>3.0</td></tr> <tr><td>コミュニケーション力</td><td>2.5</td></tr> <tr><td>発信力・行動力</td><td>2.5</td></tr> <tr><td>コラボレーション力</td><td>2.5</td></tr> <tr><td>課題発見</td><td>2.5</td></tr> <tr><td>アイデンティティ</td><td>2.5</td></tr> <tr><td>多文化理解</td><td>2.5</td></tr> <tr><td>批判・摩擦を恐れない</td><td>2.5</td></tr> <tr><td>変化への対応</td><td>2.5</td></tr> <tr><td>リーダーシップ</td><td>2.5</td></tr> <tr><td>国際教養</td><td>2.5</td></tr> <tr><td>世界への意欲</td><td>2.5</td></tr> </tbody> </table>	項目	スコア (0-4)	論理的思考力	3.5	ICT活用能力	3.0	コミュニケーション力	2.5	発信力・行動力	2.5	コラボレーション力	2.5	課題発見	2.5	アイデンティティ	2.5	多文化理解	2.5	批判・摩擦を恐れない	2.5	変化への対応	2.5	リーダーシップ	2.5	国際教養	2.5	世界への意欲	2.5
項目	スコア (0-4)																													
論理的思考力	3.5																													
ICT活用能力	3.0																													
コミュニケーション力	2.5																													
発信力・行動力	2.5																													
コラボレーション力	2.5																													
課題発見	2.5																													
アイデンティティ	2.5																													
多文化理解	2.5																													
批判・摩擦を恐れない	2.5																													
変化への対応	2.5																													
リーダーシップ	2.5																													
国際教養	2.5																													
世界への意欲	2.5																													

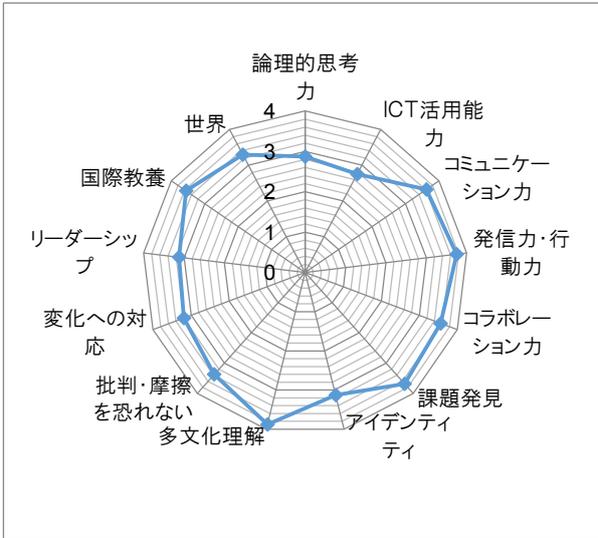
講座名	G-サロン	第2回
日時・会場	平成26年7月12日(土) 10:00-12:00	大会議室
実施内容	□ワークショップテーマ「国際協力活動」	
講師	田中加奈子(JICA 青年海外協力隊平成24年度1次 ウガンダ派遣 環境教育隊員)	
参加人数・担当	全校生徒から希望生徒60名 (国際クラス56名・その他のクラス4名)	紀藤・二宮・角野・羽石
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・協力隊について なぜ協力隊に参加したか ウガンダでの活動について ・自分たちができる貢献活動 	
成果	<p>留学時の国立公園管理システムでの研究や知床半島での外国人向け自然ガイドの経験を活かして、JICAの環境教育隊としてウガンダの森林保護のボランティア活動を行ってこられた立場から、国際協力活動についてのお話を伺った。</p> <p>国際クラスのスローガンでもある“Think Globally、Act Locally.”をメッセージとした内容であり、生徒たちは実感を持って考えることができたのが成果であった。また、昨年、国際クラス3年生が国際協力活動として、田中さんの企画したウガンダの森林保護啓発活動の一環である「合唱コンクール」の賞品用の絵本を制作したことの発展版として、今回のサロンが実現したため、多くの生徒が問題意識を持って積極的に自らの意見を主張し、議論することができた点も大きな成果であった。</p>	
評価	<p>生徒の感想には、「自分の目で確かめることが必要」、「1つの問題を解決するには1人の力ではできない」、「明日を変えるための行動ではなくても、何十年後の未来を見据えた行動をとること」等、田中氏のメッセージを深くとらえた文言が数多く見られた。アンケート結果からも、多文化理解や国際教養を学んだり、世界で活躍していこうとしたりする意欲に加え、他者と協働し、自ら行動したり発信したりすることを重視しようという意欲が養われていることがわかった。</p>	

講座名	G-サロン	第3回
日時・会場	平成26年7月26日(土) 10:00-12:00	大会議室
実施内容	□講演「国際人とは？－自分の色を作る－」 □座談会	
講師	東裕章(青年実業家・本校卒業生)	
参加人数・担当	全校生徒から希望生徒41名 (国際クラス36名・その他のクラス5名)	紀藤・二宮・角野・羽石
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・英語のできない高校時代 ・アメリカでの大学生活 … 人との繋がり・自分が誇れること ・自分の色を作る 	
成果	<p>事前の打ち合わせ時に講師が「この会場を出ていく時に一人一人が前を向いて、希望と意欲を持った顔になってほしい」と話されていた通り、進路や将来に悩む生徒や日々の生き方に漠然と悩む生徒を勇気づけ、一歩を踏み出そうとする力を与える会となった。</p> <p>座談会でも多くの生徒が積極的に自らの迷いや悩みを言語化しつつ、共に考える姿勢が見られ、議論することができた点も大きな成果であった。</p>	
評価	<p>生徒の感想には、「自分で見切りをつけたり諦めたりすることをやめてみよう」、「思いよりもまず行動してみる」等、日常の制約や不安を理由に一歩が踏み出せなかったり、諦め癖がついている様子が見受けられる反面、そういった現状を打破したいと考えている様子が見え始める言葉が多かった。</p> <p>アンケート結果からも、「発信力や行動力」だけでなく「変化への対応に前向きであること」や「批判や摩擦を恐れない気持ち」を学んだ生徒が多いことがわかった。</p>	

講座名	G-サロン	第4回
日時・会場	平成26年9月27日(土) 10:00-12:00	大会議室
実施内容	□講演「カンボジアーやきものの村の生活ー」 □座談会	
講師	黒沢浩(南山大学人文学部教授・人類学博物館)	
参加人数・担当	全校生徒から希望生徒42名 (国際クラス40名・その他のクラス2名)	紀藤・二宮・角野・羽石
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・カンボジアの社会情勢 ・カンボジアの歴史 ・カンボジアの土器の製作過程と流通について ・経済の発達と伝統文化を守ること 	
成果	<p>カンボジアと日本との月収や物価の違い等をリアルに知ることができた。</p> <p>カンボジア土器の紹介を通して、伝統文化や技術の伝播の方法やその難しさをはかることができた。</p> <p>実際に何度も訪れた経験から語られること、カンボジア土器の実物に触れることがいかに説得力が高く、伝える力の強いものか。グローバル活動の意義といったものを深く考える機会となった。</p>	
評価	<p>生徒の感想には、「日本とカンボジアでは比べものにならないくらい生活・技術の差があることを知った」「土器だけでなくほかの物について考える折にその国の文化や歴史について考えることが大切だとわかった」「経済の発展の裏には伝統文化の衰退という問題が常にふりかかっている」等、カンボジアについてだけでなく、外国や世界を知り、考えるポイントを学ぶことができたようであった。</p>	

講座名	G-サロン	第5回
日時・会場	平成26年10月25日(土) 13:00-15:00	図書館
実施内容	□ワークショップテーマ「自分の可能性を限定しない」	
講師	浅谷治希(株式会社 LOUPE)	
参加人数・担当	全校生徒から希望生徒名37名 (国際クラス33名・その他のクラス4名)	紀藤・二宮・角野・羽石
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・高校～大学生だった頃の自分 ・起業するまで ・今取り組んでいる「SENSEI NOTE」のこと 等 ・夢を語り合う(ワークショップ) 	
成果	<p>サロンの前半は講師のこれまで歩んできた道や、生き方についての講演で、後半は自分たちの夢を語り合うワークショップ兼講師との座談会であったが、高校生に「自分の可能性を限定して欲しくない」という講師の狙いどおり、普段ゆっくりと考え、語り合うことがない自らの夢を、次々と生徒達どうして語り合うことができていた。</p> <p>また、講師の成功・失敗・挫折の話や、そのときの発想・生き方の転換について知ったことで、生徒は単なる成功談ではなく、自らの生き方・生き様を考えることの大切さを学べた。</p>	
評価	<p>生徒の感想には、講師の話聞いて「お金はあくまで私自身の幸福を導くだけである」ことが再認識できた、「壁にぶちあたった時の心の持ち方」を学ぶことができた等、これまで自分の中だけで考えてきたことに対する再認識や、目の前の困難や課題に対する考え方が変わったという感想が多く見られた。また、自分の考え方や夢を語り合うという機会を得られたことで、自分が本当にやりたいことや、可能性に気がつくことができた生徒もいたようである。</p>	

講座名	G-サロン	第 6 回
日時・会場	平成 26 年 11 月 15 日(土) 10:00-12:00	大会議室
実施内容	□講演「現代俳句と HAIKU」 □座談会	
講師	加藤 耕子(国際俳句協会常勤理事・俳人協会名誉会員)	
参加人数・担当	全校生徒から希望生徒 25 名 京都府立鳥羽高校より 36 名 (国際クラス 23 名・その他のクラス 2 名)	紀藤・二宮・角野・羽石
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・俳句とは ・季語の働き ・季語の由来 ・定型ときれ ・英語俳句の紹介 	
成果	<p>俳句の基本から、英語と日本語表現の違い、ものを見る心構え等、俳句の持つグローバルで豊かな世界を考えることができた。</p> <p>「勉強で疲れたら自然の声に耳を傾けてごらん。お日様を浴びてみなさい。ゲームと違って無料ですよ。」「人は皆さもしい心を持つ。そのさもしさが競争やいじめにつながるのです。」と語りかけられた言葉からは、俳句の枠組みを越え、現代におけるストレスやいじめを解消するには自然に触れることが有効であるとあらためて気づくことができた。</p>	
評価	<p>生徒の感想には、「英語と日本語において共通する感覚がある一方で、日本では感じない感覚もあり、新たな気づきを得られた」、「文化は高いところから低いところに流れるというお話があり、日本の文化が海外にも流れ出ていることを誇りに思う」、「古代から人々が自然から癒しを得て、その一瞬を感じ取って俳句を詠んでいたことを知り、自分の生活にも取り入れてみたいと思った。」等の意見が見られた。携帯電話やコンピュータにばかりかじりつくのではなく、自然を五感で感じることの大切さを学んだようである。</p>	

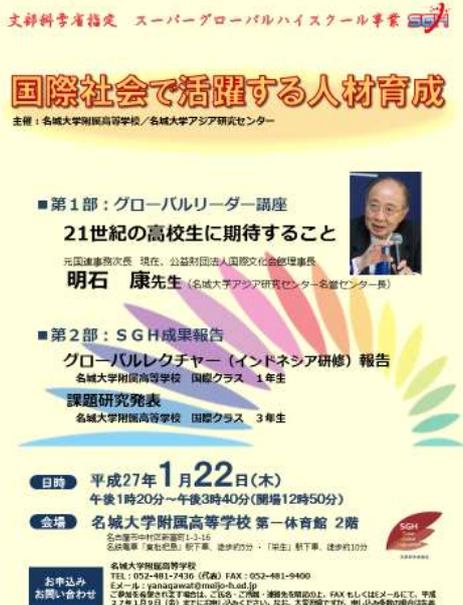
講座名	G-サロン	第7回
日時・会場	平成27年1月10日(土) 10:00-12:00	大会議室
実施内容	□講演「グローバル人材時代の学び方、生き方～外国人教授の考え」 □座談会	
講師	アーナンダ・クマラ(名城大学外国語学部(認可申請中))	
参加人数・担当	全校生徒から希望生徒16名 (国際クラス15名・その他のクラス1名)	紀藤・二宮・角野・羽石
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・グローバル人材時代 ・国際開発 ・今の自分にできること ・新学部とグローバル人材 等 	
成果	<p>母国スリランカの大学では理系専攻であったクマラ氏が経営工学やグローバル人材育成に携わるようになった経緯やなぜ欧米ではなく日本で研究や仕事を選択したか等の自己紹介・実体験を踏まえ、途上国、欧米と日本との違いやグローバル人材とはどういうものかをわかりやすくお話しいただいた。</p> <p>「グローバル人材とは何か?」という問いかけにより受講者を揺さぶり、自分たち価値観、視野がまだまだ狭いものであることを考え、見直すことができた。日本企業の海外現地法人企業数や日本の学生の海外留学の現状といった具体的なデータの提示により、国としての取り組みがアジア圏の中で立ち遅れていることの問題点を共有することもできた。</p>	
評価	<p>生徒の感想には「世界中の課題と向き合い、常に解決策やアイデアについて考えていくことが大事なのだ」、「日本人の語学力の低さも問題の一つだが、日本の技術・文化を現地に合わせて工夫するという視点が日本には欠けている」といったコメントがあり、このサロンを通して、その時だけの瞬発性や受け身の発想ではグローバルな人材とは呼べないことを気づくことができたようである。</p> <p>クマラ氏との懇談では、「先進国としての日本の問題点をフェアトレードとの関連性につなげ考えることができた」等本来のグローバリズムの姿について認識を深めることができた。</p>	

⑤ グローバルリーダー講座

以下の日程で実施した。特に第2回（1月22日）の実施に関しては、生徒実行委員会を組織し、生徒による準備・運営とした。詳細は後述の各回の報告書を参照。

回	日時	講師
1	11月17日 (月)	田中武憲氏(名城大学アジア研究センターセンター長・経営学部教授) 「グローバル化下の愛知の企業・経済と求められる人材像」
2	1月22日 (木)	明石康氏(名城大学アジア研究センター名誉センター長・元国連事務次長) 「21世紀の高校生に期待すること」

講座名	グローバルリーダー講座	第1回
目的	課題研究の推進と、SGH 事業を校内へ普及するにあたり、生徒が自律的キャリアデザインを形成する機会をつくることを目的に、多様な講師を招聘して、対話を通して日本と世界のつながりや世界の課題に対して考えるためのプログラムを実施する。	
日時対象	平成26年 11月 17日 月曜日 6限	全校生徒対象 1875名
テーマ	グローバル化下の愛知の企業・経済と求められる人材像	
講師	田中武憲(名城大学 経営学部 国際経営学科 教授)	
担当	二宮・紀藤・橋本・江上	
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・愛知県の経済の現状について ・「モノづくり立国」日本を支える2大産業(エレクトロニクス・自動車)について ・エレクトロニクス産業の製品の特徴と技術変化について…1990年代までの「アナログ型」から2000年代からの「デジタル型」のモノづくりの特徴 ・アップルの経営について ・日本企業(日本人)の強みと弱み ・アップルや中国製製品を支える日本のモノづくり ・愛知のモノづくり…「尾張」と「三河」の協調・連携について ・トヨタを中心とする自動車産業の特徴 ・グローバル経営のなかで使われている「日本語」について 	
成果	講演の成果として次の4点があった。①愛知の産業、具体的にはトヨタの事例から、産業におけるグローバル化の現状の一端を知ることができた。②日本流のモノづくりとは何か、日本企業の強みは何かを知ること、外国企業との違いとが明快になった。③経営の中で使われる日本語と英語の違いに気づくことで、日本企業や日本人が大切にしている考え方を知ることができた。④上記の3点等から、グローバル社会で求められる人材像には「異なる価値観を正しく理解し、受容する柔軟性」「絶え間なく自らの価値を高め、外に発信するコミュニケーション力」であるという結論の大切さを認識できた。	
評価	第2回高大連携講座の明石康氏の講演につなげる講演として位置づけて企画したものである。地元愛知の産業について具体例から、グローバル化の現状と求められる人材について知ることができた。時間的制約があったため質疑応答ができなかったという課題や、明石講演に連続する部分があったが、生徒がそれをもっと感じ取れるような仕掛けが必要であると思われた。	

講座名	グローバルリーダー講座 第 2 回	
目的	課題研究の推進と、SGH 事業を校内へ普及するにあたり、生徒が自律的キャリアデザインを形成する機会をつくることを目的に、多様な講師を招聘して、対話を通して日本と世界のつながりや世界の課題に対して考えるためのプログラムを実施する。	
日時対象	平成 27 年 1 月 22 日 木曜日 5 限	1・2 年生対象 1290 名
テーマ	21 世紀の高校生に期待すること	
講師	明石康(名城大学アジア研究センター 名誉センター長(元国連事務次長))	
担当	伊藤(憲)・羽石・橋本・江上・二宮・紀藤・伊勢田・水田	
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・ご自身が国連に勤めることになった経緯や、当時の社会背景、勤める中で感じたこと ・日本の若者や大学に足りないと感じていること ・グローバル人材に必要なこと(①コミュニケーション能力、②やる気・志・チャレンジ精神、③世界の異なる文化を理解する知的好奇心) 	
成果	<p>語学能力の獲得について、語学を必要とする環境を作ることが大切であるとのこと意見を伺った。それは「恥をかく機会を増やすこと」であるという。さらに実際の現場では、お国なまりの英語が飛び交っており、言語を流ちょうに話すことが出来る表現力よりも、伝える内容や、相手の心の「ひだ」を感じることであることが大切であるとお話を伺った。長年国連という場で活躍をされてきた明石氏ならではの講演であり、生徒には、学び続けることと失敗を恐れないことの大切さが伝わったようで、勇気とやる気をもらったとの声を聞くことができた。</p>	
評価	<p>明石氏の講演に対しては、生徒から「戦争・紛争はなぜ起きてしまうのか」「国連に勤めて、世界の見方はどのようにかわったのか」「イスラム国に対して身代金は払うべきか否か」等の質問があり、生徒の現在の世界情勢に関する関心の高さや、率直な疑問をぶつけたいという姿勢がうかがえた。</p>	

(3) 成果の公表・普及

次の①～⑤の5回で校内・校外に向けて発表・報告等を行った。

① 課題研究発表会

日時 : 平成26年10月21日(火)
内容 : 日本語による課題研究発表
発表者 : 国際クラス第3学年28名

② ESD ユネスコ世界会議併催イベント「あいち・なごや ESD 交流フェスタ」

日時 : 平成26年11月8日(土)9日(日)
内容 : 作成ポスターの掲示
・海外研修(インドネシア)に関するポスター
・フェアトレードに関するポスター



③ SGH 成果報告会

日時 : 平成27年1月22日(木)
内容 : 英語によるSGH事業の成果報告
発表1 : 国際クラス第1学年 宮田未稀 渡邊紗彩
海外研修(インドネシア)報告「Report of the study trip in Bali」
発表2 : 国際クラス第3学年 小川彩華
課題研究発表「Assisting Developing Countries by Expansion of Japanese Companies」
講評 : 名城大学アジア研究センター名誉センター長 明石康氏
名城大学アジア研究センター長・経営学部教授 田中武憲氏

④ 国際クラス第3学年課題研究発表会

日時 : 平成27年2月18日(水)
内容 : 英語による課題研究発表
発表者 : 国際クラス第3学年 28名
講評 : 名城大学外国語学部(認可申請中)アーナンダ・クマール氏
名城大学外国語学部(認可申請中)藤田衆氏
名城大学人間学部 フィリップ・ヒューズ氏
名城大学外国語学部(認可申請中)村田泰美氏
名城大学外国語学部(認可申請中)二神真美氏
名城大学外国語学部(認可申請中)柳沢秀郎氏
名城大学外国語学部(認可申請中)ポール・デビッド・ウィッキン氏



⑤ 生徒研究発表会

日時 : 平成27年2月26日(木)
内容 : 英語による課題研究発表、海外研修(アメリカ)報告
発表1 : 国際クラス第3学年 江崎航平
課題研究発表「The "Can's" and "Can not's" of Presentation Skills
～The Comparison of Japanese Skills to Foreign Skills～」
発表2 : 国際クラス第3学年 森琴美
課題研究発表「Change the Stressful Society」
発表3 : 国際クラス第2学年 高橋杏奈・竹内大輝・松下あかね
国際クラス第1学年 井上明俊・西嶋優・間瀬ちの
海外研修(アメリカ)の報告
講評 : 名城大学 外国語学部(認可申請中)アーナンダ・クマール氏



(4) グローバルパスポート

「グローバルパスポート」には、主に以下の2つの機能が必要である。(別紙様式6 平成26年度構想調書 p.15 を参照)

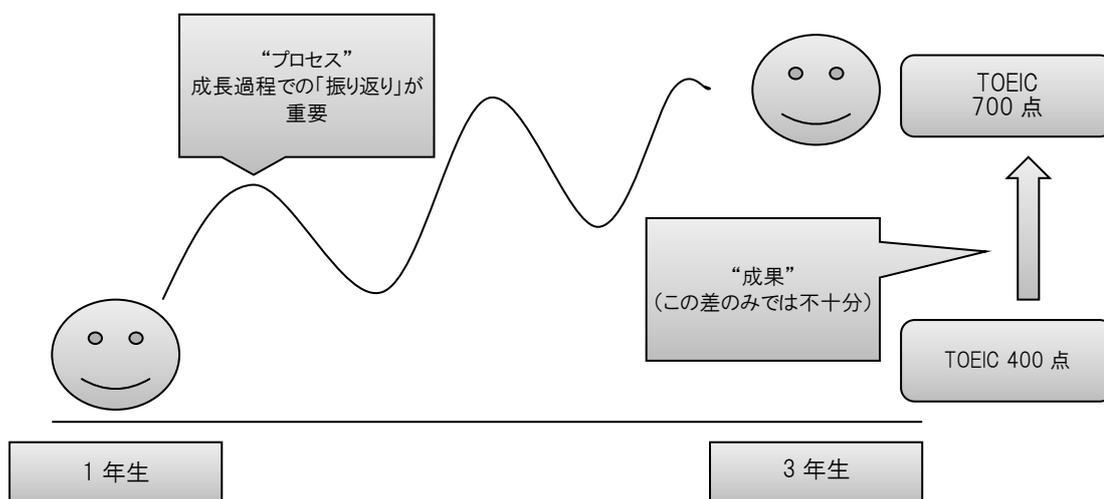
(ア) 生徒や教員が「いつ、誰が、どのようなプログラムに取り組んだか」の履歴や成果の管理ができ、それらをポイント化できること。

(イ) 取り組みの過程において、生徒自身が質の高い振り返りができる仕組みを提供すること。

つまり、グローバルパスポート開発とは包括的評価だけでなく形成的評価を重視するシステムの開発となる。

そのうえで、現段階では当初計画していた電子版のポートフォリオに関しては実現していない。しかし一方で各種の資格取得への取り組みや課外活動への取り組み、国内外の大会や研修等への取り組みをグローバルパスポート対象となる活動として設定しているためその記録を集積させている。

また、平成27年度途中からは名城大学の国際化推進センターによって開発されている紙媒体での「グローバルパスポート」が運用予定であるため、電子版ポートフォリオの開発が完了するまでは本校でも協働で運用する。



(5) 事業の評価

SGH 事業の評価には、ルーブリックを用いたパフォーマンス評価とアンケート評価を利用した。

パフォーマンス評価では、「総合的な学習の時間」及び教科「グローバル」で実施される「発表」と「レポート・課題研究論文」の際にルーブリックを使用して評価した。一例として、以下にレポート・課題研究論文評価におけるルーブリックを記載する。

レポート・課題研究論文評価におけるルーブリック				
	4	3	2	1
論理展開	客観性のあるデータに基づいており論理的である。アウトラインも明確で論理展開に無理がない。	大方は客観性のあるデータに基づいており、論理的である。アウトラインの流れも無理がない。	客観性のないデータを利用しており、論理性に不安がある。アウトラインが不明瞭な部分がある。	必要なデータがなく論理が矛盾・破綻している。アウトラインが不明瞭である。
文章表現	誤字・脱字がなく、適切な表現が使われている。文のつながりも明瞭で読みやすく、展開をスムーズに理解できる。	誤字・脱字はほとんどなく、適切な表現が使われている。文のつながりはある程度スムーズに理解できる。	誤字・脱字がある。適切な表現が使われているが、文のつながりが不明瞭な箇所がある。	誤字・脱字が多く、表現が不適切な箇所がある。文のつながりも不明瞭で読みにくい。
書式・レイアウト	規定の書式設定に全て当てはまり、目次・脚注・出典・図表の整理も全て適切に行われている。	規定の書式設定に全て当てはまる。しかし、目次・脚注・出典・図表の整理に関しては、一部適切でない部分がある。	規定の書式設定と異なる。目次・脚注・出典・図表の整理に関しては、一部適切でない部分がある。	規定の書式設定と異なる。目次・脚注・出典・図表も整理されていない。
先行研究・調査・分析	3冊以上先行研究の分析をしており、そのうえで足を使った調査をしている。調査の手続き・分析も適切である。	3冊以上先行研究の分析をしており、そのうえで足を使った調査をしている。調査の手続き・分析には一部不明瞭な点もある。	1～2冊の先行研究の分析をしており、そのうえで調査をしている。調査の手続き・分析には不明瞭な点もある。	文献による先行研究の分析がされておらず、調査も実施していない。

また、第1学年の5月と2月、第2学年と第3学年は2月にSGH事業に関する質問紙調査を実施した。質問紙は、本校が設定した「グローバルシチズンシップを獲得するために必要なスキルとマインドセット」をもとに12の因子を取り入れ設計した。(別紙様式6構想調書を参照)ここではスーパーグローバルテスト(以下、SGT)と呼ぶ。

また、全学年とも外部講師のワークショップや海外研修、Gサロン等各種のプログラムごとにSGTを基本としたアンケート評価を実施した。

SGTの質問紙と因子は以下の通りである。選択紙には4段階の順序尺度を用いた。

スーパーグローバルテスト(Super Global Test)		
No	質問紙	因子
1	データや資料を基に法則を見出したり、その法則を他のことにあてはめて考えたりする。	論理的・批判的思考力
2	コンピュータネットワークを活用することは重要だ。	ICT活用能力
3	うまく意思疎通ができないときには、自分の殻やこれまでのやり方を越えて接する。	コミュニケーション力
4	自分から行動したり、人に伝えたりする。	発信力・行動力
5	仲のいい友達以外ともつながったり、力を合わせたりする方が良い。	コラボレーション力
6	問題点や課題に対して、それを解決するための具体的なことをやってみる。	問題発見・解決能力
7	自分自身やそのルーツとなるものについて考える。	アイデンティティ
8	様々な文化や様々な社会について理解したい。	多様性の認識と共感
9	人と意見が違ったり、周りの人と違ったりしていても、それはそれで構わない。	摩擦・失敗への耐性
10	想定外のことに對しても、自分なりに対処しようという意欲がある。	変化への対応
11	チームで活動するとき、周りの人に働きかける。	リーダーシップ
12	将来、日本にいても海外にいても、世界の色々な問題や状況につながって生きていきたい。	キャリア
13	イメージで判断せず、その情報が確かなものか気にする。	論理的・批判的思考力
14	コンピュータネットワークを利用して情報を収集し、加工できる。	ICT活用能力
15	自分とは違う考えや習慣に対して、興味がある。	多様性の認識と共感

16	目標達成のための具体的な方策を明らかにする。	リーダーシップ
17	問題を解決するには、新たな考え方を取り入れることは大事だ。	変化への対応
18	チームで活動するときには、自分の役割を活かして参加する。	コラボレーション力
19	何気ないことにも疑問を持って考えてみる。	問題発見・解決能力
20	探究学習は、自分の将来や進路を考えるうえで重要だ。	キャリア
21	行き詰ってからも、粘り強い方だと思う。	摩擦・失敗への耐性
22	自分の国のことについても正しく知る必要があると思う。	アイデンティティ
23	ものごとを様々な角度から考える。	論理的・批判的思考力
24	人前で発表することは苦ではない。	発信力・行動力
25	相手の話や意見を引き出して聞くことができる。	コミュニケーション力

(6) 報告書の作成

授業での取り組みについては、授業担当者が1年間の授業を振り返るレポートを作成し、課外活動については、それぞれの取り組みごとにワーキンググループを組織して活動を実施するごとに毎回レポートを作成して蓄積を行った。それらのレポートを実行委員会が総括して報告書を作成した。

(7) 他 SGH 指定校との連絡・交流

主に以下の通り交流等を行った。

平成 26 年 9 月 25 日 (木) 岐阜県立大垣北高等学校打ち合わせ

平成 26 年 9 月 26 日 (金) 愛知県立旭丘高等学校打ち合わせ

平成 26 年 11 月 8 日 (土) 立命館高等学校シンポジウム参加

平成 26 年 12 月 12 日 (金) 愛知・岐阜・三重 SGH 三県打ち合わせ

平成 26 年 12 月 24 日 (水) 静岡県立三島北高等学校打ち合わせ

平成 27 年 1 月 20 日 (火) 東海四県 SGH 協議会

平成 27 年 1 月 22 日 (木) SGH 成果報告会

愛知県立旭丘高等学校、三重県立四日市高等学校等参加

平成 27 年 1 月 30 日 (金) 兵庫県立葺合高等学校 SGH 中間発表会参加

平成 27 年 2 月 25 日 (水) 群馬県立中央高等学校打ち合わせ

※愛知・岐阜・三重・静岡の指定校とメーリングリストを設定した。SGH ミーティングや SGH フェスタの運営実行においても、メーリングリストを活用する。

6 目標の進捗状況・成果・評価と次年度以降の課題

本校の「研究開発目標」と「実践目標」に沿って記載する。

(1) 【研究開発目標①】

高大の連携・協働を進め、グローバルリーダー養成のための各種プログラムを本校独自の取り組みである「グローバルパスポート」制度において 25 件以上実施する。

① 進捗状況・成果・評価

グローバルパスポートの対象となる活動（項目）としては、実用英語検定や TOEIC への取り組みと成果、G サロンへの参加回数と取り組み、フィールドワークへの参加状況等を設定している。本校が計画したプログラムとしては 18 件の項目を実施した。それらをポートフォリオとして記録する形式については検討中である。以下にその活動を記載する。

対象プログラム		件数
本校の活動	G サロン	7
	グローバルリーダー講座	2
	成果報告会・生徒研究発表会	3
	海外研修における各種研修・フィールドワーク・プレゼンテーション等	6
本校以外の活動	実用英語検定(全 3 回)	3
	TOEIC(全 8 回)	3
	国内外の大会や研修等	多数

また、今年度の取り組みを終え、グローバルパスポート対象の取り組みにどの程度興味を持っているかを捉えるために、第 1 学年（36 名）に来年度の G サロンへの参加意欲を 4 段階の順序尺度で聞いた（図 1）。その結果、64%の生徒は参加意欲が高く 36%の生徒が今後の参加に意欲を見せていない。参加意欲に対する平均値は 2.7 ポイントであった。

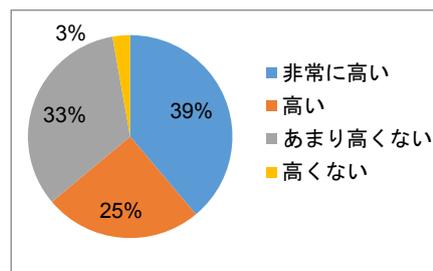


図 1 Gサロンへの参加意欲

この結果をもとに、G サロンに 3 回以上参加した生徒とそれ未満の参加回数の生徒とで比較したところ、3 回以上参加した生徒の意欲の平均値が 3.4 ポイントであるのに対して、3 回未満の参加であった生徒の意欲の平均値は 2.3 ポイントであった。このことから、ある程度の回数を参加した生徒の意欲は高いといえるが、自由参加である以上、もとより意欲の高い生徒が参加していることも想定されるため、今後、更なる分析が必要である。

また、資格取得以外の自由参加形式の活動をも記録し評価する本制度は、生徒の様々な経験や学びを評価する仕組みであり、一定の生徒の意欲を喚起する効果がある。

② 次年度以降の課題及び改善点

現在、当初計画していた電子版のポートフォリオに関しては実現していない。したがって、引き続き電子版のポートフォリオを構築する方法を探りつつ、紙媒体でのポートフォリオを運用する必要がある。

グローバルパスポート構想は、名城大学の国際化推進センターにおいてもグローバル化推進プログラムの 1 つとして計画されている。そして平成 27 年度中には紙媒体のものを運用する予定である。高校生が大学のプログラムを先取りして取り組むことが可能になる等、大学と共通で実施することの効果も期待できるため、連携して運用するよう調整を行う。

また、同時に本校の取り組みとしてのグローバルパスポート対象活動も充実させていく。今年度は SGH の主対象である国際クラスの生徒を対象に活動（項目）を設定した。今後は、名城大学との連携を視野に入れながら活動（項目）を多様化し、より多くの生徒が SGH 活動への参加を希望するようなものを創出する。

特に、まずは生徒が参加するような仕組みを作ることが肝要である。そのために対象活動（項目）を事前に生徒に明示し、1 つ 1 つの活動に参加するごとに段階を踏んだという達成感を持たせられるポイント制を盛り込むよう設計する。なお、ポイント制については、それぞれの活動をポイント化し、学年ごとに達成のポイント数を定めて目標達成率を算出する。

(2) 【研究開発目標②】

PBL におけるコンフリクト・レゾリューション、ジグソー学習、フリップトクラスルームの各教科における展開例の開発と定着を進める。

① 進捗状況・成果・評価

総合的な学習の時間における探究学習での展開を中心に、国際クラスでの各授業での実施を試みた。主なものは以下の表の通りである。

クラス	学年	教科	科目	内容
一般進学	1	スーパーサイエンス	SS I	新聞記事切り抜きプロジェクト
				キャリア研究発表
国際	1	総合的な学習の時間	多文化共生 I	企業課題探究
				多文化共生ワークショップ
	2	総合的な学習の時間	多文化共生 II	エスノグラフィプロジェクト
				国際協力活動
				南山大学連携プロジェクト「モノを読み解く」
	3	総合的な学習の時間	課題探究	課題研究
	2	英語	コミュニケーション英語 II	マララ・ユフスザイさんのストーリー作成と発表
				英字新聞切り抜きプロジェクト
	3	国語	現代文	新聞切り抜きプロジェクト
	2	公民	現代社会	思想の範囲におけるジグソー学習
地域経済統合と FTA・EPA について考える				
代理出産について考える				
CSR・CSV について考える				
3			社会の在り方:教育のコストはだれが負担するのかについて考える	

このような教授型ではない授業形態は、後述のように、国際化を進める国内や海外の大学等、課題研究を生かした研究ができる大学へ進学する意欲を形成する要素となっている（図 12 参照）。

また、本目標は各教員が従来行ってきた授業展開や取り組みを意識し、教員間で共有する機会が生まれつつあることも成果としてあげられる。

② 次年度以降の課題及び改善点

「総合的な学習の時間」及び教科「グローバル」や教科「スーパーサイエンス」を核に、PBL におけるコンフリクト・レゾリューション、ジグソー学習、フリップトクラスルームを展開してきた。次年度以降はそれらの取り組みを共有し、様々な教科でより多くの教員が実践できる形にすることを目指す。本年度は教員間で PBL やジグソー学習等について情報を共有したり、研修したりする機会が生まれてきた。これをより発展的にしていく必要がある。一方で、すでに「総合的な学習の時間」及び教科「グローバル」や教科「スーパーサイエンス」の授業を担当している教員が学校設定教科以外の授業においてもそれらの手法を取り入れて展開している状況でもある。

今後は教科の枠にとらわれず、HR 指導等を含め様々な機会に利用できる形に整理することで、本目標の達成に近づくと考える。

(3) 【実践目標①】

探究型学習を通して、自らネットワークを構築し、協働して問題解決に向かう、スキルとマインドセットを育成する。

① 進捗状況・成果・評価

本校では「スキルとマインドセットの育成は、グローバルシチズンシップの獲得に有効である」との仮説をもとに研究開発を実施している。

本校におけるスキルとマインドセットは右図のとおりであり、育成の手法として探究型学習を用いるが、今年度探究学習として実施したものは、授業では「多文化共生Ⅰ」、「多文化共生Ⅱ」及び「課題探究」である。また、課外活動では「Gサロン」、「グローバルリーダー講座」、「海外研修（インドネシア・アメリカ）」である。



本目標の進捗状況としては、各探究型学習を通じて生徒のスキルとマインドセットに変容が見られているという段階である。以下にその測定結果を示す。

主対象である国際クラス第1学年には担任指導のもとで前述のSGTを5月と2月に実施した。第2学年と第3学年には2月に総合学的学習の時間を使ってそれぞれ実施した。

第1学年の結果としては、5月時点よりも全ての因子の平均値で2月の結果が上回った(図2、表1)。

各々の質問について回答結果のt-検定を行ったところ、特に、「論理的・批判的思考力」因子の質問 No.13「イメージで判断せず、その情報は確かなものか気にする」 $t(33)=5.69, p<.05$ 、「発信力・行動力」因子の質問 No.4「自分から行動したり、人に伝えたりする」 $t(33)=5.57, p<.05$ 、「問題発見・解決能力」因子の質問 No.6「問題点や課題に対して、それを解決するための具体的なことをやってみる」 $t(33)=5.43, p<.05$ が有意であった。また、それぞれ平均値が2.1ポイントから3.0ポイント(No.13)、2.3ポイントから3.1ポイント(No.4)、2.0ポイントから3.0ポイント(No.6)へと上昇した。

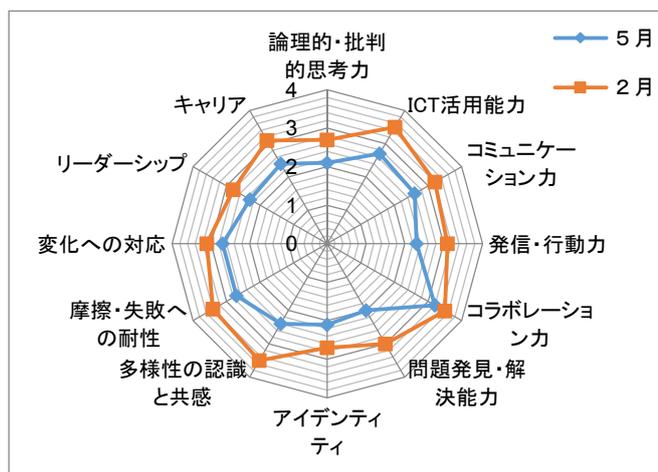


図2 国際クラス第1学年におけるスキルとマインドセットの変容

表1 国際クラス第1学年におけるスキルとマインドセットの変容 N=36

	論理的思考力	ICT活用能力	コミュニケーション力	発信・行動力	コラボレーション力	問題発見解決能力	アイデンティティ	多様性	批判・摩擦・失敗への耐性	変化への対応	リーダーシップ	キャリア
5月	2.1	2.7	2.6	2.3	3.2	2.0	2.1	2.4	2.7	2.7	2.3	2.4
2月	2.7	3.5	3.2	3.1	3.5	3.0	2.7	3.5	3.4	3.1	2.8	3.1

今年度の取り組みによってスキルとマインドセットがある程度向上していることはわかった。そこで、それらが何によって向上しているのかを探るべく、SGTのグローバルシチズンシップに関する因子「キャリア」の要素である、質問No.12「将来、日本にいても海外にいても、世界の色々な問題や状況につながって生きていきたい」に「とても思う」、「思う」と答えた生徒(27名/36名)に対して、その回答を導くことになったと考える要素を調べた(図3)。同様に、他の質問紙調査の項目にある「日本や世界の課題に取り組む意欲」がある生徒(27名/36名)にも、その回答を導くことになったと考える要素について調べた(図4)。

要素群は以下の8つである。

- 1 授業での成果や経験
- 2 英語力の向上
- 3 探究型学習を行う授業での成果や経験
- 4 海外研修での成果や経験
- 5 フィールドワークの活動経験
- 6 サロン等での外部講師との交流経験
- 7 学外での研修や大会等への参加経験
- 8 先輩からの経験談

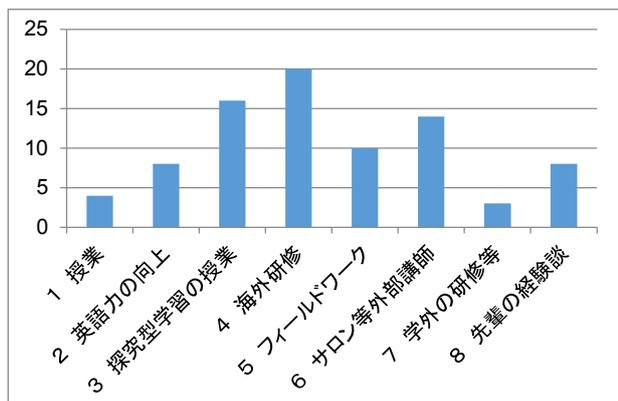


図3 グローバルシチズンシップの形成に影響すると考える要素

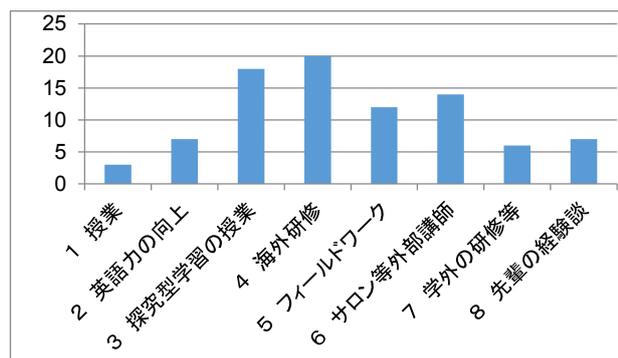


図4 日本や世界の課題に取り組む意欲を育てたと考える要素

結果として、「3 探究型学習の授業」、「4 海外研修」等探究型学習を行う要素の影響が高い。「5 フィールドワーク」の数はそれほど多くなかったが、フィールドワークは探究型学習の授業や海外研修の中で実施しているため、それだけを抽出して考えるのは難しい面があったかもしれない。したがって、探究型学習を実施する諸活動は生徒のスキルとマインドセットの育成に効果があると言えよう。特に「4 海外研修」の影響が大きい。今年度は初めて第1学年での海外研修を実施したが、その影響が顕著に出ていると言える。

また、2月時点での3学年(97名)を比較してみると、比較的どの学年においても著しく低い因子は見られないながら、学年進行に合わせて平均値が高くなっている訳ではない(図

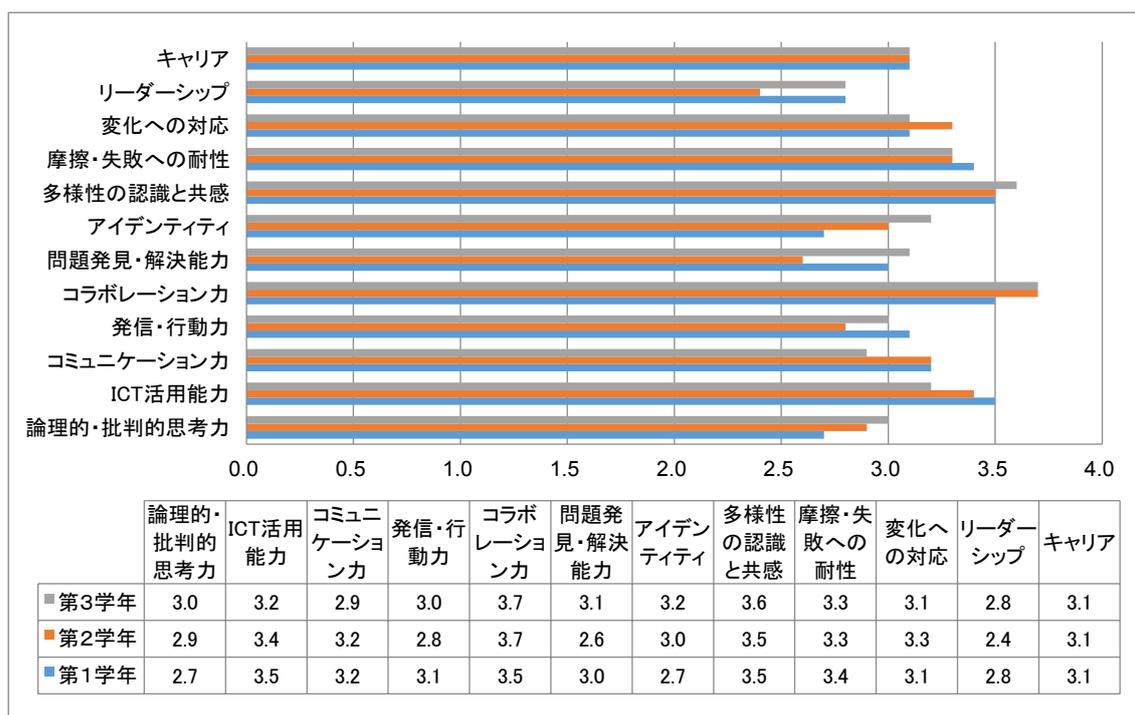


図5 学年別SGT結果(2月) N=97

5)。因子「ICT活用能力」でも第3学年の平均値が最も低い(3.2ポイント)。しかしこれは、上級生になるにつれてレポートや論文作成の機会が増え、先行研究や文献を調査することを指導されている影響から「ICTのみに頼ってはいけない」という意識が働いているとも考えられる。学年によって到達目標の設定が異なる以上、学年間を単純に比較はできないが、各学年の平均値の高さから、年度中に実施してきた探究型学習の成果はどの学年においてもある程度認められる。

② 次年度以降の課題及び改善点

課題としては、探究学習のどの要素がスキルとマインドセットの育成に関わるかを追求すること、スキルとマインドセットの適切な測定方法の開発、の2点である。

そのために、各授業や課外活動での取り組みのねらいを整理し、スキルとマインドセットの枠組みに当てはめる。また、各々の授業や課外活動を段階的に組み合わせ、統合するよう設計する。そのうえでどの取り組みにおいても事前の準備を充分に行い内容の深化を進める。特に取り組みの意義や目標等について生徒にも意識させ共通理解を持ったうえで実施するよう工夫する。

評価については、ICT活用能力には「情報活用の実践力尺度」、コミュニケーション力には「コミュニケーションスキル尺度」、コラボレーション力には「協同作業認識尺度」及び「友人との学習活動尺度」、アイデンティティには「アイデンティティ尺度」、リーダーシップには「PM指導行動測定尺度」等、既に使用されている尺度を参考にし、それぞれの因子のルーブリックを作成する。

なお、今年度のSGTの測定は、主対象である国際クラス生徒のみを対象としたが、次年度は普通科一般進学クラスの第1学年(特別進学クラスとスーパーサイエンスクラスを除く)にも実施する。

(4) 【実践目標②】

国内と海外でのフィールドワークを課題研究論文完成までに 4 回以上実施し、それらの実践的活動を通して、ローカルとグローバルを往還する視座を獲得させる。

① 進捗状況・成果・評価

本目標は 3 年間で 1 つの期間として設定しているため、現段階でローカルとグローバルを往還する視座を獲得したかは測定できていないが、フィールドワークの実施については以下の通りである。

- ・第 1 学年では、「海外研修」の「グローバルレクチャー」におけるインドネシアでの聞き取り調査と、「総合的な学習の時間」の「多文化共生Ⅰ」における企業課題探究により、各企業や商品についての意識調査を街頭で実施した。
- ・第 2 学年では、「総合的な学習の時間」の「多文化共生Ⅱ」において、JICA 中部での聞き取り調査と観察を実施した。
- ・第 3 学年では、「総合的な学習の時間」の「課題探究」における課題研究論文作成における調査として、課外活動にて各生徒が研究課題に基づいて聞き取り調査や質問紙調査等を行った。

国際クラス	学 年	場 所		対 象	時 期
	1	海外研修	インドネシア: 王宮・美術館・農家	全員	10 月 29 日
	1	企業課題探究	愛知県内各地	全員	6 月・7 月
	2	国際協力	JICA 中部	全員	10 月 22 日
	1・2・3	海外研修	アメリカ: 株式会社パタゴニア	一部	1 月 28 日
	3	課題探究	企業・地方公共団体・財団等	全員	4 月～8 月

成果としては、次年度以降にフィールドワークを実施する意欲の高い生徒が育っていることである。今年度終了時の第 1 学年 (36 名) を対象にした調査では、今後のフィールドワークの実施に対して「積極的に参加したい」(27%)、「参加したい」(58%) と回答した生徒は 85% であった (図 6)。

そして、今年度フィールドワークに積極的に取り組んだと回答した生徒と、積極的には取り組んでいないと回答した生徒を比較すると、積極的に取り組んだ生徒の次年度のフィールドワークへの意欲の平均値が 3.6 ポイントであるのに対して、積極的ではなかった生徒の平均値は 2.5 ポイントであった。(全体の平均値は 3.3 ポイント) つまり、積極的に取り組んだ生徒程、次年度の取り組み意欲も高い。

また、前述の通り、今年度は第 1 学年で初めて海外研修を実施した。事前学習で「ローカルとグローバル」の関係や問題を学んだうえで、現地では「伝統」と「開発」という側面からローカルとグローバルの問題に取り組んだ。現時点でそれらを往還する視座を獲得したかどうかは測定できないが、研修後のレポートから判断すると、ローカルとグローバルを意識するところはできたようである。

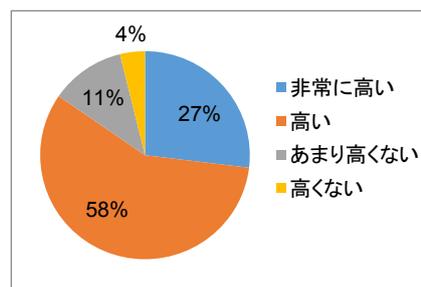


図 6 フィールドワークに対する意欲

② 次年度以降の課題及び改善点

本目標の達成においては、まず生徒たちに経験させることが肝要である。経験を重ねることで自信をつけ、より自主的・積極的な探究姿勢と高い到達目標を自らに課して努力を重ねるといった一連の流れができていく。そのため、生徒の興味関心と合致する、様々な分野領域の活動内容・課題を用意するとともに、実践目標②～④の諸活動が関係・補完し合うように複合的に構成する。特に生徒自身が活動後にフィードバックができたり、段階を踏んでいると実感できたりするよう設計するため、活動内容を精選して構成する。

また、フィールドワークで得たローカルとグローバルの視点を様々な事象に当てはめ応用して考えることのできる論理的思考力につなげなくてはならない。次年度はフィールドワークの事前事後学習において、様々な事象におけるローカルとグローバルの視点の「型」を学ぶ機会を増やす。

(5) 【実践目標③】

国内外の研修、大会及び社会活動に年間 3 回以上参加させる。

① 進捗状況・成果・評価

国内外の研修、大会及び社会活動に年間 3 回以上参加した生徒の割合は、3 学年合わせて 82.7%であり、1 人平均で 6.2 回の応募もしくは参加をした。以下に主な参加先と参加数、表彰について記載する。

研修・大会・社会活動	参加数	表彰
G サロン(全 7 回)	260 名	
海外研修(アメリカ)	8 名	
国際理解教育特別講座:今、地球社会が抱える問題を考える 主催:NPO 法人 愛・知・みらいフォーラム 共催:愛知県国際交流協会 後援:中日新聞社	15 名	
愛知教育大学地域連携フォーラム 2014 「外国人児童生徒学習支援プロジェクト」講演会	8 名	
国際理解教育セミナー in なごや 2015	12 名	
JICA 中部 開発教育・国際理解教育実践報告フォーラム 2015 セントが見つかる! 仲間に会える! -	4 名	
JICA 中部グローバルカレッジ 2014 第 3 回イベント「学校に行きたい」	7 名	
第 58 回全国学芸サイエンスコンクール 主催:旺文社 後援:内閣府・文部科学省・環境省	28 名	人文社会科学研究部門 入選:名知(第 3 学年)
第 6 回 IIBC エッセイコンテスト	103 名	学校奨励賞
JICA国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト2014	34 名	佳作:板倉(第 2 学年) (高校生の部 28,793 点中)
国際ユース作文コンテスト国際	29 名	佳作:土田(第 2 学年) (151 カ国・若者の部 9,229 点中)
日台文化交流青少年スカラシップ作文	9 名	秀作:土田(第 2 学年) 秀作:南谷(第 2 学年)
高校生 英語でプレゼンテーションコンテスト 主催:東海学園大学教育学部	2 組 (8 名)	優秀賞:(第 2 学年) 菅沼・高橋・中井・花井・吉永 学部長賞:(第 2 学年) 板倉・古田・安井
英語スピーチコンテスト愛知県大会	3 名	
愛知大学国際コミュニケーション学部 高校生スピーチコンテスト	1 名	
大阪大学国際公共政策学会プレゼンテーション	3 組 (6 名)	3 組:予選通過・学会参加 菅沼・高橋・中井・南谷・花井・安井
クエストカップ 2015 主催:教育と探究社 後援:経済産業省・東京都教育委員会	10 組 (36 名)	1 組:全国大会出場 河西・榊原・鈴木・松下・吉田(第 1 学年)
未来を築くユース 100 人会議(全 6 回) 主催:愛知県国際交流協会	18 名	
Global Enterprise Challenge2015 主催:NPO 法人アントレプレナーシップ開発センター	3 組 (21 名)	
その他ボランティア	9 名	

成果としては、国内外の大会や研修等に参加する生徒が着実に増加していることである。当初は外部の大会等に参加することを恥ずかしがったり、億劫がっていたりした生徒が一度参加したことをきっかけに自発的に参加するようになってきている。

今年度終了時の第1学年を対象にした調査で、研修、大会及び社会活動に参加する意欲のある生徒の77%が「積極的に参加したい(33%)」、「できる限り参加したい(44%)」と答えている(図7)。

さらに、今年度に2回以上参加した生徒とそれ未満の参加回数の生徒で比較してみると、2回以上参加した生徒の平均値が3.3ポイントであるのに対して1回きりの参加の生徒は平均値が2.5ポイントであった。また一度も参加していない生徒の意欲の平均値は1.3ポイントであった。参加回数の多い生徒の自由記述からは、「校外の大会等に出ると、他校の生徒の様子も見られて刺激になる。」や「校外の研修等では、世代の違う人たちとも真剣に話し合う機会があって興味があった。」といった意見が聞かれた。

もちろん元来意欲の高い生徒が積極的に参加したことは想定されるが、本校外で実施されている諸活動への参加経験を積むことで、学習への意欲や自信に繋がる傾向も見受けられる。また、校外での活動経験・学習経験を利用することで、多面的に生徒のスキル・マインドセットの育成を支援できた。

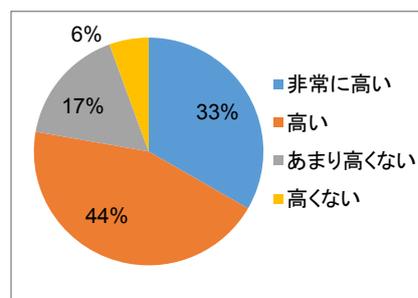


図7 国内外の大会や研修等へ参加する意欲

② 次年度以降の課題及び改善点

実践目標②と同様、本目標の達成においてもまず生徒たちに経験させることが肝要である。生徒にとって日常の学習・生活領域の外側にある学びの機会を、それまで見過ごしてきた知識を「身近な知識」、「使える知識」に転換するきっかけとなる。その第一歩をどのように創出するか、興味関心の低い生徒をどのように学外の活動・大会に向かわせるかは、さらに工夫が必要である。また、それらの諸活動をフィードバックできるような設計を進める。

また、改善点としては、Gサロンの実施日に資格試験や模擬試験の受験等が重なることがあったため、適切な時期に実施できるよう調整を徹底する。

(6) 【実践目標④】

プレゼンテーションを、国際クラスの生徒は年間 12 回以上実施する。

① 進捗状況・成果・評価

進捗状況としては、第 1 学年、第 2 学年で達成し、第 3 学年では達成できなかった。以下に各学年の回数を記載する。ただし、第 1 学年では多文化共生プログラムのワークショップや企業課題探究プログラム、グローバルレクチャープログラムにおけるグループ発表も対象とした。第 2 学年、第 3 学年については、全て個人発表である。

学年	回数	実施授業(回数)
1	12	総合的な学習の時間における「多文化共生Ⅰ」10 グローバル教科「英会話Ⅰ」2
2	13	総合的な学習の時間における「多文化共生Ⅱ」7 公民教科「現代社会」4 グローバル教科「英会話Ⅲ」2
3	8	総合的な学習の時間における「課題探究」3 公民教科「現代社会」2 グローバル教科「英会話Ⅲ」3

また、今年度終了時の第 1 学年（36 名）を対象にした調査では、92%の生徒がプレゼンテーションに対して意欲的に取り組もうとしている（図 8）。「以前は人前で話す等想像もできなかったが、どのような人にどうやって伝えればよりわかりやすく伝わるか等工夫して話すようになり、外部のプレゼンテーションコンクールにも出てみようと思うようになった。」という意見も聞かれた。

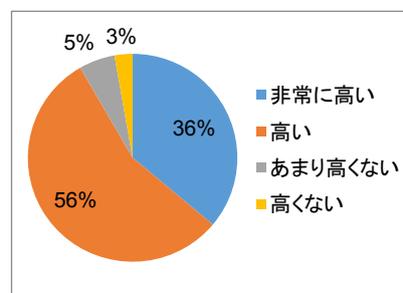


図 8 プレゼンテーションに対する意欲

このような高い意欲を生む背景には、学年の枠を越えた学び合いの機会があることがあげられる。国際クラスでは、第 1 学年の企業課題探究プレゼンテーション、第 2 学年の

「TED Conference」を使った英語プレゼンテーション、第 3 学年の英語での課題研究発表等を他学年が視聴して評価する実践も行われており、こういった機会を通じて上級生と下級生が共に学び、意識を高めていく流れができています。

また、前述の通り、学外のプレゼンテーションコンテストに応募する生徒が増え、表彰されたことも成果といえる。

② 次年度以降の課題及び改善点

実践目標②と同様、本目標の達成においてもまず生徒たちに繰り返し経験させることが肝要である。しかし、各教科での実施が全体を通して効果的に構成されるべきであるため、次年度は各教科での実施状況を集約し、その内容や工夫を共有するとともに相互補完ができるように構成する。次年度に関しては一旦グローバル教科が中心となって各教科でのプレゼンテーション状況を集約することとする。

また、第 1 学年に関しては次年度から実施される「イングリッシュプレゼンテーション」の授業を用いて、プレゼンテーションの実施を通してプレゼンテーションの技術や英語だけでなく論理的思考を育成する。

(7) 【実践目標⑤】

卒業時における CEFR の B2 レベル到達率を、国際クラスの生徒は 100%とする。

① 進捗状況・成果・評価

実用英語技能検定 2 級合格として読み替えた場合、卒業時の CEFR の B2 レベル到達率は 96.4%であった (図 9)。

また、第 3 学年 (28 名) の実用英語検定での準 1 級の取得率は 14.3% (図 9)、学年別 TOEIC スコアの平均が 651.3 点 (図 10) である。

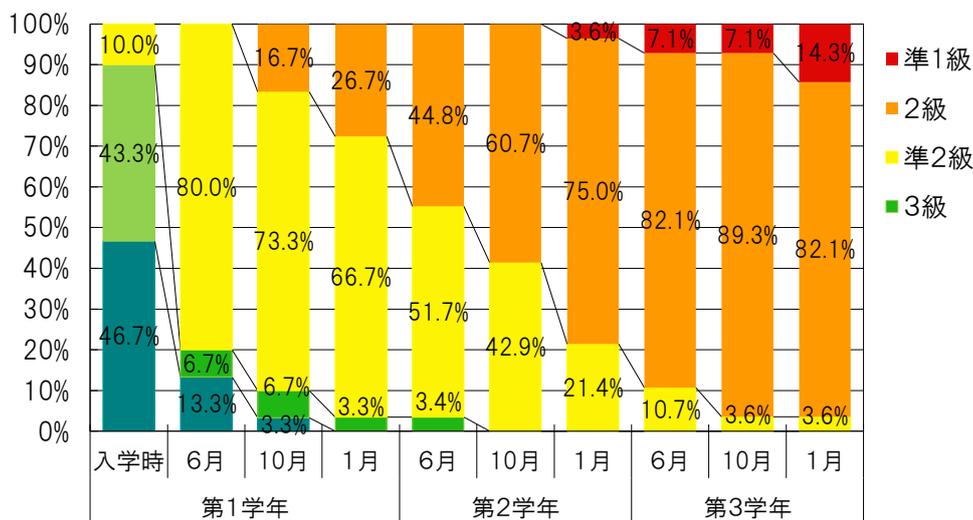


図 9 平成 24 年度入学生の実用英語検定取得率推移

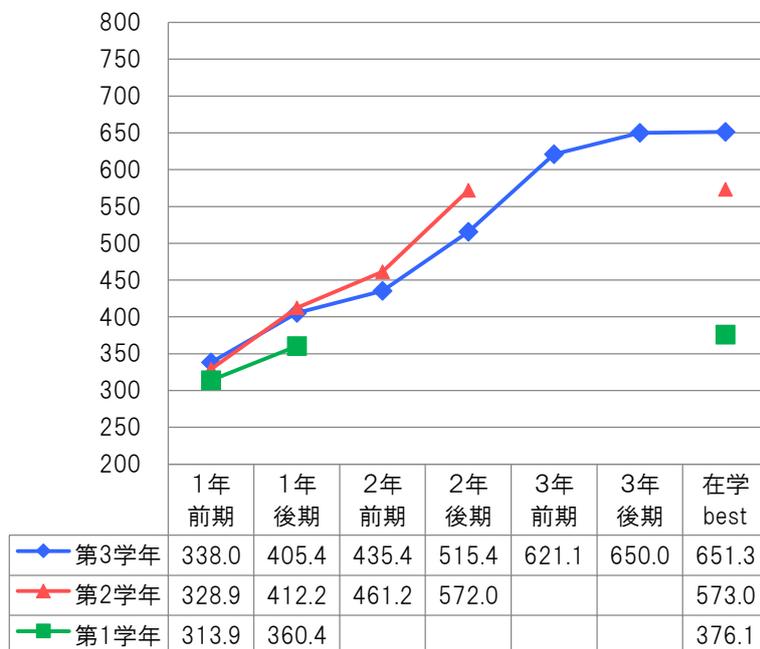


図 10 学年別 TOEIC スコア平均推移

この結果は平成 26 年度の構想調書にあるような実績には並ばなかった (昨年度の第 3 学年の実用英語検定準 1 級取得率 37.5%、TOEIC の平均スコア 712 点) が、第 3 学年 (28 名) の卒業時に実施した調査では、卒業後も英語力の向上を目指す意欲を持つと答えている生徒は 82.1%、その語学力を研究や職業に結び付けて運用したいと答えている生徒は 78.6%であり、英語力の伸長が自信と意欲につながる流れは確認できる。

さらに、今年度終了時の第1学年(36名)を対象にした調査では、94%の生徒が英語の学習に対して興味と意欲を持っている(図11)。国際クラスでは、大学受験のためだけの英語学習ではなくコミュニケーションツールの1つであることを重視し、4技能にわたる活動を行っているが、その取り組みと意欲と成果がある程度繋がっていることは評価できる。

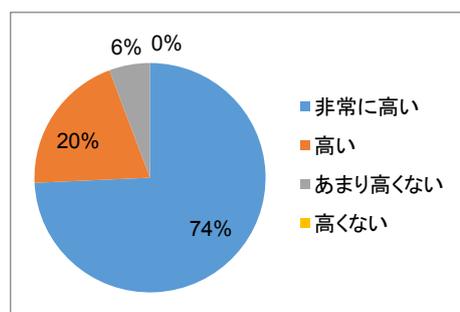


図 11 英語の学習に対する興味と意欲

② 次年度以降の課題及び改善点

今年度の第3学年の英語学習で考えると、TOEICで910点を取得する等、高い点数を取る生徒が育成している。しかし、昨年度と比較するとクラス平均では61.4点低く、(昨年度は712.7点、今年度は651.3点)入学時点から卒業時点までのスコア上昇の平均でも22.3点低い。(昨年度は362.3点上昇、今年度は340.0点上昇)つまり、上位層を伸ばす取り組みや指導は充実してきた一方で、中位層・下位層の生徒の英語力向上に対しては一層の工夫が必要であるといえる。

現時点でのSGH対象生徒である国際クラスは、探究学習はもちろんのこと英語学習にも意欲の高い生徒が比較的多い。英語学習に対して一定の成果を実感させることは他の学習に対しての意欲にも影響し、キャリア意識にも直結する面が見受けられる。したがって、次年度は上位層への指導は継続しながらも、中位層・下位層の生徒への支援を充実させ、どの生徒も成果を感じることを目指す。

また、コミュニケーションツールとしての英語力を重視しつつも、現状では「聞くこと」・「読むこと」に偏重する傾向にある。「聞く」、「読む」の力を元に、自らの思考や経験を発信・表現するための「話すこと」や「書くこと」を重視する。そのため、2技能だけでなく4技能を総合的に育成し、測定する手法を研究する。

(8) 【実践目標⑥】

国際化を進める国内や海外の大学等、課題研究を生かした研究ができる大学へ進学する生徒を育成する。

① 進捗状況・成果・評価

国際クラス第3学年においては、上智大学総合グローバル学部、立命館大学国際関係学部をはじめ、横浜市立大学国際総合科学、青山学院大学地球社会共生学部、立命館アジア太平洋大学国際経営学部、同志社大学グローバルコミュニケーション学部、関西学院大学総合政策学部、関西大学外国語学部、政策創造学部、南山大学外国語学部等、国際化を進める大学や課題研究をさらに発展させることのできる大学への進学が決定している。

また、在校生においては、国際クラス第1学年では52.8%、国際クラス第2学年では51.5%の生徒が該当の大学への進学を希望している。

また、第1学年では52.8%の生徒が該当の大学への進学を希望している。彼ら(19名/36名)に対し、その回答を導くことになったと考える要素を聞いた(図12)。要素群は図3、図4と同様である。

結果として、「3 探究型学習の授業」を中心に「7 学外の研修等」が多く、「2 英語力の向上」、「4 海外研修」、「5 フィールドワーク」が続く。探究型の学習によって研究したい課題を発見し、学外の研修や大会で自信をつけ、興味関心をさらに広げている様子が見受けられる。

その他「SGH プレミーティング」では、名古屋大学大学院、国際基督教大学、立命館大学で学ぶ卒業生を招聘し、ピアサポートを取り入れた探究型学習のワークショップを実施した。活動後も卒業生との座談会が自主的に行われる等、キャリアについて考える機会となった。

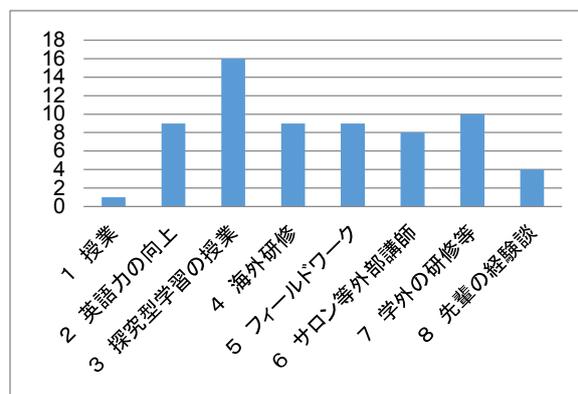


図12 国際化を進める大学や課題研究を活かした研究ができる大学への進学意欲に影響すると考える要素

② 次年度以降の課題及び改善点

前述の通り、国際クラスの第1学年、第2学年においてはおよそ半数しか国際化を進める大学等、課題研究を生かした研究ができる大学への進学を希望していない。もちろん下級生であればあるほど進路や将来を具体的に考える生徒の割合は減る傾向にあることは容易に想像できるが、グローバルな世界における自律的なキャリアを形成するうえでは、該当の大学への進学する希望を持つ生徒を増やしていく必要がある。

一方で、今年度終了時の第1学年(36名)を対象にした調査では、79%の生徒が「以前より、自分の将来について具体的に考えるようになった」としている(図13)。さらに、76%の生徒が「将来、日本にいても海外にいても、世界の色々な問題や状況につながって生きていきたい」と回答している(図14)。

すなわち、漠然としてではあるが自律的なキャリア形成をしたいと考えており、具体的に将来を考え始めているが、「大学」の学びに対してイメージがわいていないと考えられる。

したがって、次年度は、様々な機会で卒業生を含む大学院生や大学生等によるピアサポートを実施することで、生徒達に身近なキャリアモデルを見せる等、上級生を中心に大学での学びを知る機会を増やし、大学での研究とキャリア形成の関係をイメージできるように努める。また、キャリア形成への意欲を高めるには生徒の経験と成果から来る自信を育むことも必要である。そのため自らの成果とプロセスを可視化できるような形でのグローバルパスポートの設計を進める。

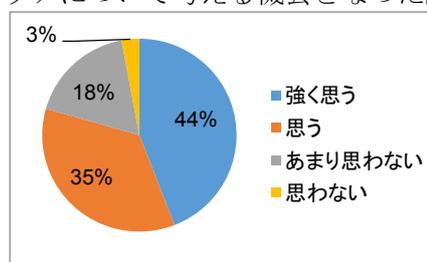


図13 自らのキャリアについての具体的思考

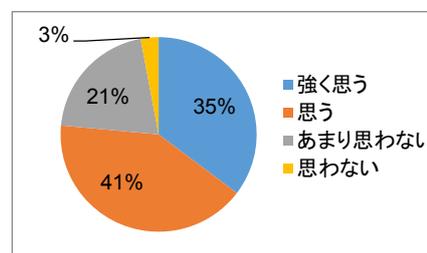


図14 グローバルシチズンシップを持ったキャリア形成への志向